

広島県立美術館

研究紀要

第7号

- アジアの工芸調査ノート -タイ・ミャンマー(ビルマ)の漆芸・染織- …… 村上 勇 1
- 個人蔵「巖島・住吉祭礼図」-堺市博物館蔵「住吉祭礼図」のその後- …… 知念 理 39
- 『改正香道秘伝』(上巻)の翻刻 …… 石橋健太郎 47
- 南薫造「インド日記」 …… 藤崎 綾 1

2004



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL
ART MUSEUM

No.7

2004

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

南薫造「インド日記」

藤 崎 綾

広島県立美術館では、本県豊田郡安浦町出身で日本の印象派の代表的画家として知られる南薫造(1883・明治16-1950・昭和25)の研究のため、ご遺族のご協力のもと生家に残された資料の調査を行ってきた。資料のうちには日記や書簡類が含まれ、これまでもそれらの内容が研究・発表¹されている。本稿では、明治末のヨーロッパ留学²に続いて南薫造の2度目の海外渡航となるインド旅行の際に書かれた日記(以下「インド日記」と記述)を抜粋して紹介する。

南薫造がインドに向けて出発するのは1916(大正5)年の1月18日のことである。インド日記はこの日から起こされ、上海、シンガポール等を経てインドに到着し、約40日間の滞在後、ボンベイから帰国の途に着くまでほぼ毎日書かれている。インド日記が書かれたノート(20.5×15.6cm)には1912(大正元)年から1915(同4)年までの記述も含まれるが、インド旅行についての記述が大半を占め、全文横書きで記されている。本文は126ページに渡り、末尾に「結婚」「言葉」「気候」「宗教」といった項目別にインドについての覚え書きが4ページと、交通費や宿泊費等の経費メモが2ページ続く。

本稿では紙幅の都合により、原文を掲載するのはインド国内滞在中における動向を記した部分のみとし、日本出発からインド到着迄は簡略化して紹介するにとどめる。またコロンボからインド最初の滞在地マドゥライまでの動向、及びカルカッタ滞在中にダージリンに足を伸ばし数日間滞在した時の日記は、自筆文³に詳述されているため割愛し、末尾の覚え書き等も省略するものとする。

日記の冒頭で南はインド旅行について「去年の夏から約束」していたと述べている(1月18日付)。インドへ同行したのは永見徳太郎(1890-1950)。長崎出身で後に『南蛮長崎草』などを著し南蛮美術研究者として知られる。夏汀と号した。南は18日に郷里・賀茂郡内海(現・豊田郡安浦町)を出発し、翌日早朝永見と長崎で会い、夕方諏訪丸に乗って日本を離れる。上海(1月21日着)、香港(26日)、シンガポール(2月1日)、マラッカ(3日)、ペナン(4日)への上陸・滞在中を経て2月9日にコロンボに到着。セイロン島を縦断し船でインドに上陸、最初の滞在地マドゥライをめざす。インド到着までの20日余りの間には、上海の新公園やペナンの極楽寺など各地を観光するとともに、ときおり制作もおこなった。長崎で乗船した翌日から船上で油絵を描きはじめ、上陸先では宿泊先周辺の風景を水彩で制作。船長や他の乗務員のスケッチも行っている。当初の旅行計画ではシンガポールで諏訪丸を下船し、カルカッタ行きの船に乗り換えるはずであった⁴。しかし乗り換え船の到着予定が不明であったために諏訪丸に乗船しつづけ、コロンボ経由でインドに上陸することになる。旅程の変更を余儀なくされたものの、その後の旅は順調に進んでいる。博物館や各種の寺院、遺跡などを精力的にまわりつつスケッチを重ね、美術雑誌への原稿も執筆した⁵。ホテル⁶やバンガローを利用しながら10都市以上を訪問。ホテルではときおり日本人旅行客と接することもあった。ペナレスのホテル・ド・パ

りでは大谷光瑞が隣室に宿泊。大谷は1泊したのみで北部へ向けて立つが、食事やインドの話をしながら一夕を共に過ごした。次の滞在地アグラでは、東京美術学校時代からの友人・和田三造と遭遇。和田は南より一足早く前年の11月下旬からインドを旅行しており⁷、ボンベイ方面をまわって⁸ 3月10日にはホテルメトロポールに宿泊していた。和田はアグラからファテプール・シクリヤデリーに向かい、結果的には旅行中の再会は果たせなかったものの、後の宿泊先を打ち合わせて再会を約していたことがわかる。インド滞在中は、旅行者同士だけでなくインド在住の人々とも親しく交際した。カルカッタの正金銀行や、別所商会、郵船会社など現地で働く日本人を訪問。旅行中の必要事でもあるが、私的にも交際を深めながら現地の情報や旅行中の日本人の動向なども得られる貴重な機会でもあった。インドでの交際のなかでも特筆すべきは、タゴール家への訪問である。タゴール家と交友のあった日本人美術家としては、岡倉天心や横山大観、菱田春草ら日本美術院の画家たちの存在が知られている。南らは2度にわたって同家を訪問し、タゴール兄弟に接した。タゴールは相次いで死去した春草と天心への哀惜の意を示し、自身の作とともに所蔵している大観、春草の作品を紹介している。タゴールや前述のインド在住日本人との交際、博物館や植物園訪問、オペラや映画鑑賞など、カルカッタ滞在中の観光と交際にもっとも多忙な日々となったが、一方制作面でもっとも充実していたのはアグラ滞在中のことである。近隣のチニカロザ⁹の風景に魅了され2日間通って制作に励んだほか、帰国後発表した《婚礼の夜の催し》(口絵5)の画題を得たと考えられる描写が日記に記されている¹⁰。長年憧れていたインドへの旅行は、他にも多くの画題をもたらした。帰国後の第10回文展¹¹には、前述の《婚礼の夜の催し》とともに、インドの民俗衣装を身に纏った女性像で人間の五感を表現した《五境》を出品。それまでの画風とは一線を画す構想画ともいえる新たな試みは、好評とともに批判的な批評も招いた¹²。その後の第5回日本水彩展¹³ではインド旅行のスケッチ49点を特別陳列している。

インド旅行の実現が具体化し始めたのは1915(大正4)年の夏のことだが、インドの文化への強い興味はイギリス留学時代にすでに明らかにされている。ロンドンでは博物館に通ってインドやパキスタンの仏像やレリーフを熱心に模写。当時使用したスケッチブックには作品の模写のほか、ガンダーラ彫刻のコレクションを誇る美術館についての記述や、インドにおける仏教史の転記も含まれる。インドに対する評価や関心は、留学時代をともに過ごした友人・白瀧幾之助にも強い印象を与えている¹⁴。ヨーロッパからの帰国後は、滞欧記念絵画展¹⁵や第4回文展に留学時代の成果を発表。文展初入選を受賞で飾り、その後も不出品だった第8回展をのぞき第9回展(1915年)まで連続受賞。インド旅行の年までに、画壇での地位を不動のものにしていたといえる。しかし第9回展の作品評からは、画風の変化を指摘する論評が多くあらわれるようになる¹⁶。インド旅行は、ヨーロッパでの成果のみにたよらず、新しい方向性を模索する時期になされたと言い換えることもできるだろう。また周辺には、インド愛好家とも呼ばれる美術家のごく身近な友人として存在していた。イギリス留学時代を共有する富本憲吉は一足早くインドを訪れ、宗教芸術のすばらしさにふれた感激を伝え¹⁷、和田三造の1916(大正5)年の旅行は、インド再訪の旅であった。周囲の状況や制作上の変化を求める内的な必然性により、インドへの憧れや旅行実現への熱意はいっそう高められたことと思われる。さらに当時は、タゴールの人物や作品も美術雑誌で紹介され、美術関係者の目がインドに向けられつつある時期であった。

南の帰国から数か月後には、荒井寛方が渡印しビチットラ美術学校で絵画指導にも当たっている。

「インド日記」は、画家としての大きな転機を迎えたという点で、画業全体の中でもとりわけ興味深い時期における南を知るためのみならず、大正期の日本人美術家とインドとの関わり的一端を示す意味でも貴重な資料であるといえる。

【註】

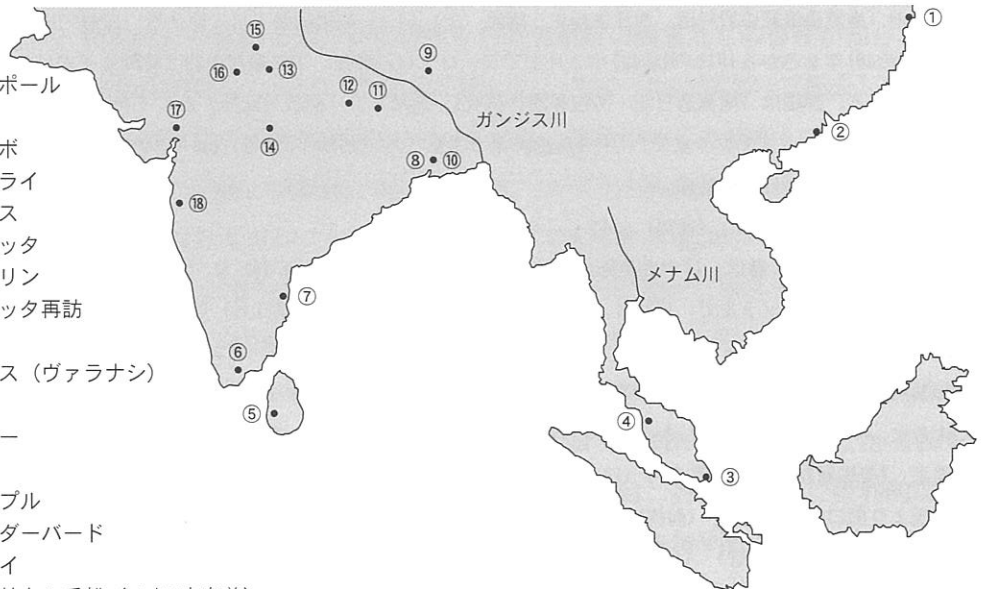
- 1 岡本隆寛・高木茂登『南薫造日記・関連書簡の研究』1988年
高木茂登「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について」広島県立美術館紀要第1号 1994年
大井健地「南薫造筆記の岩村透「西洋美術史」講義（上）（下）」前掲紀要1号/同2号 1994/1995年 他
- 2 1907(明治40)年9月から1910(明治43)年2月までヨーロッパに滞在。主に最初の約2年間をイギリスで過ごし、後パリにも渡っている。詳細は『南薫造日記・関連書簡の研究』（前掲）に「倫敦日記抄」として発表されている。
- 3 南薫造「セイロンよりマヅラまで」『中央美術』第2巻第5号（1916年5月号）pp.44-49/「ヒマラヤ山へ」『みづゑ』第136号（1916年6月号）pp.9-13
- 4 「セイロンよりマヅラまで」（前掲）p.44
- 5 「南氏より田口氏への書信」（『中央美術』第2巻第5号・1916年5月号p.49）に「御約束の旅行記」とあるように、同誌へ「セイロンよりマヅラまで」（前掲）、「バナレースとアグラ」（第2巻第6号）を寄稿している。
- 6 南はコロンボでトーマス・クック・アンド・サン社に立ち寄りホテル・クーポン券を買い求めている（2月9日付日記）。南の参照したガイドブック *INDIA Information for Travellers landing at Bombay and Calcutta*（ボンベイの同社出版）によると、インド国内で宿泊した全9か所のホテルは全てこのクーポンが利用できるホテルであった。
- 7 「消息」『美術新報』第15巻第3号（1916年1月号）p.58
- 8 「南氏より田口氏への書信」（前掲）
- 9 《アグラ チニカロザ附近》（『中央美術』第2巻第6号・1916年6月号p.57）や《印度アグラ・チニカロージャ》（『みづゑ』第143号・1917年1月号p.88）として同地に取材した作品が紹介されているほか、《印度アグラの聖地》と題する別の作品が郡山市立美術館に所蔵されている。
- 10 3月17日付日記。タージマハールからの帰途に見に行った婚礼の踊りの描写。
- 11 1916(大正5)年10月14日-11月14日（於・竹ノ台陳列館）。なお、南はこの年からはじめて文展審査員となった。
- 12 例えば《婚礼の夜の催し》について、「大變面白い水彩畫であると思ふ、色と色のマッスも配置よく一枚の繪として纏まりも好い（中略）これまでの南君の水彩として優れた作品である」との評価もある（織田一磨「文展の水彩畫」『みづゑ』第141号・1916年11月号p.43）一方で、石井柏亭は「人物に生意乏しく且つひどく硬く又潤ひのない」点を批判し、南の作としては「甚だ首肯しかねる」と述べている（「文展の洋畫」『中央美術』第2巻第11号・1916年11月号p.29）。
- 13 1918(大正7)年4月3日-4月30日（於・竹ノ台陳列館）。49点を旅行順に展示した。：『みづゑ』第159号(1918年5月号)p.15
- 14 イギリスでの南について「繪の學校に通つて居る傍ら、常に美術館へ入つて印度やペルシャ、埃及などの古代藝術を調べて居た」と述べている。：白瀧幾之助「新文展審査委員評 南薫造氏」『中央美術』第2巻第9号（1916年9月号）p.5
- 15 南薫造・有島壬生馬滯欧記念絵画展覧会。1910(明治43)年7月4日-7月20日（白樺社主催/於・竹ノ台陳列館）。この展覧会は、日本の洋画家による初の個人的展覧会といわれる。
- 16 「幾分手法の上に転化を求めている。表現にある強さを出そうとしている。それがまだ動揺の中にあつて自信が足らぬように見える」（雪堂「第9回文展合評」『美術新報』第15巻第1号・1911年1月号p.49）。また満谷国四郎も「南の画風も少し変わってくる」（「安井君の絵と僕の絵」『美術新報』第15巻第1号p.30）と、南の画風の変化に言及している。
- 17 1910(明治43)年3月21日付。全文が『南薫造宛 富本憲吉書簡』奈良県立美術館編集 1999年に掲載されている。

以下に紹介するインド日記は、インド上陸数日後のもので、前日夜にマドゥライから乗車しマドラスへの移動中である2月13日から、ダージリン滞在を除き、日記の最終日4月4日までの記述である。

本文中の□は判読不能の文字を、「/」は改行をあらわす。誤記と思われる文字や紛らわしい表現には、その上部に（ママ）を付した。句読点は原本によったが、内容の理解を助けるために区切りを意図する空白を加えた。旅行中の印象を急いで書きとめたためか、南の記述としては珍しく誤字・脱字や文意の通りにくい箇所があるほか差別的表現も含まれるが、原則として原文のまま掲載した。主な寄港地、滞在地と到着日は下図に示すとおりである。

1/19 長崎から諏訪丸に乗船

- ① 1/21 上海
 - ② 1/26 香港
 - ③ 2/1 シンガポール
 - ④ 2/4 ベナン
 - ⑤ 2/9 コロンボ
 - ⑥ 2/12 マドゥライ
 - ⑦ 2/13 マドラス
 - ⑧ 2/17 カルカッタ
 - ⑨ 2/26 ダージリン
 - ⑩ 2/29 カルカッタ再訪
 - ⑪ 3/7 ガヤ
 - ⑫ 3/8 ベナレス（ヴァラナシ）
 - ⑬ 3/10 アグラ
 - ⑭ 3/16 サンチー
 - ⑮ 3/19 デリー
 - ⑯ 3/20 ジャイプル
 - ⑰ 3/22 アーメダーバード
 - ⑱ 3/23 ボンベイ
- ボンベイから吉林丸に乗船（4/19広島着）



インド旅行の主な寄港地（往路）と滞在先・到着日

「インド日記」

十三日。人の声の喧噪（ママ）のみ目醒む。五/時である。汽車は今まTrichinopolyの停車/場に置いて居るのであった。窓からのぞいて見ると白/衣をまき着けた男や赤い布の女が無数に居る。プラ/ットホームに巾を擴げて其の上に眠って居るものもゴロ/く居る。のんきなものだ。棚に上って眠る。八時/頃迄横になって居た。停車する度に非常に噪が/しい。ヨロイ戸の間から強い光りが射し込む。/Tanjore等も何時の間にか過ぎて居/た。Cauvery riverを渡る。牛群砂原に在り/窓外の景色は昨日と余り変らないがシャボ/テンは一層多くなって来た様だ。そして昨日迄は/杓子形のものばかりであったのが今日多角円柱形の/種類を増した。水溜りには睡蓮が白ろく/美しく咲き幾種の鳥は飛び交ふ。食堂車/が無いのでバナ、を買ったが渋くって食へない。色/の好いのが甘からうと思って特に黄色なのを持つ/男のを買ったが其れが間違であった。後ちラ/ム子等を賣る汽車中の男に緑色のを買ってもらっ/たら甘まかった。昼食も果物で

済ます。停車／場の一隅に素焼の円い瓶を三段に構へ／上の瓶の底にわらしぶを通して之れより
／水を滴らして一番冷たいものを／下に貯へる仕組をして居る。昨日もさ程／暑くは無かったが
今日は心持が一層よい。田や／畑にやる水をくむ はねつるべの上に一人／二人の人が上って水
を上げる時には端に来／垂瓶を下ろす時には中心に来るのを多く見／る。稲の刈入れの男女も多
い。男が稲を／かりつゝある形は埃及の絵其儘である。／女等は大きなたばを頭の上に乗せて運
ぶ。／chidam baramは朝十時に通過す。河を／距てゝ、テンプルの四塔を見た。河には多くの／人
が水浴し河に沿ふた草原には家畜の群れ／があり、椰子を交へて濃緑の森があり、森の上／に□
たかき黄色の塔の正面と横面のもの／が立って居るのは実に美しい風景画であった。／Cuddalore
などの小停車場を十一時頃過ぐ。／午後になって平野の内に初めて小丘を見た。／赤土の小丘の上
に一つのGopuram（塔）が／峙つ 緑の茂みが其の下を点をうつ。下／には恰も楯の如く見ゆる或
は伊太利のオリーブ／の如く見ゆるアカシヤの林が一行になり、野／には羊と山羊が遊んで居た。
諸所に乾い／た沼の如きものを見て過ぎ野は漸々と／樹木を増して来 小山も見へて来る。人家
が／増し且つ大きな建物となり、西洋風になつ／て来、路に自働車の一二を見た。マドラス／は
近かついた。五時半頃Madrasに着。／Madras Egmoreの停車場に着いた／ら馬車屋や苦力が窓に
鈴なりとなった。／其れ等をむちで打ってよけて来た英国人の／ユニホームの男は自分等の名と
行先、出発地等を記／した。馬車でBrund's Hotel¹に行く。／停車場から可成りあった。宿は印
度の大きな／家を其の儘ホテルにしたものと見へて門を／入って樹木の下を通り這入る。ウェー
ターの一人／が出て来て英婦人を招いて来た。大きな建物／を中央に置いて庭を距てゝガレリー
の如く建／てられた一室に導く。前後にアーケード／を持った室で土間の上^(ママ)に藤の敷物が敷／て
ある。白壁には何の装飾もしてない。横に長く／浴室などが連らなる。初め這入った時は不思議
な感がしたが後ちには寧ろ他に気兼ね／のないよい所だと思った。後ろの庭はまた甚だ／廣く
池があり畑に連らなり、百姓が働い／て居る。久振りに湯に入る。八時食堂に／行く。／

十四日 六時目醒む。後庭に鳥を／初め色々の鳥の鳴声が出て居る。水彩／を一枚画く。茶後
また裏にて一枚画く。／九時朝飯の後ち博物館に行く／美しき石像の多くとブロンズの甚だ立派
／な多くを見た。馬車はピープルsparkと云ふ／のへ往って動物園を見る 犀と大きな獅々／
と虎の外にはバク位のものであった。／High Courtの前を通りCook²に一寸寄り帰／り昼食。午
後は後ろの廊下に机を持ち出し／日記等書きまた水彩を一枚画く。夕食後／馬車にてblack town
をdriveする。月／甚だ明らかで少々涼し過ぎる位である。／ハーボア迄行き引き返す。宿の直
く近辺で／馬車屋が日本人が居ると教へる。小屋の月／陰に暗らい家の柱にもたれて人が立って
／居る 英語で何んとか云った。今晚はと馬車の／中から吐鳴ったら どうぞいらっしゃい、と日
本の／女の声がした。よくも見ず其儘宿に帰る。／十時、室の石壁のやもりも昨夜程／気味悪る
く思はなくなった。今日裏の庭／で一尺余のカメレオンに似たblood sucker／が沢山居るには驚
いた。木鼠は多く走っ／て居る。室内に蛙が跳ぶのも余り気持ちの／よいものではない。

十五日。マドラスの二晩目。朝寝をした 七時／半頃 Chota Hazri (起きた時の茶) を済ます。／九時半朝めしを食った後ち散歩する。昨夜通つ／た日本人の家の前を電車道に沿って行きMount Roadに出る。Mount Roadはマドラスの／目ぬきの通りである。本屋に行って絵葉書と／地図を買ふ。また大きな家で絵葉書と／煙草を買って帰る。外はさすがに暑い。／昼食の後ち三脚を持ち出して宿の井戸／端を寫す 下働きの者等が立って見る。云ふ事／(意味は通じないが) が日本人など、同様／である。室に帰ってまた一枚アーケード／を内から寫す。永見君はベッドに眠つ／て居る。お茶の後ち出発の準備をする。／諸拂ひを済ます。二人のを合せて下の如し。／宿料 4日分 (二人で二日) ／お茶 (Afternoon Tea)、飯物、4^R 2^A／馬車 三度 8^R 8^A／即ち四日分の宿料をクーポンで拂ひ／外に12Rupees10Annasを拂ふ。／(ホテルクーポンは一日7 Rupeesなり)。／六時頃馬車が来る。Central Stationより汽／車は七時発の豫定なり。場席を宿より停車／場に電話で懸合つてある筈であったが／其れがして無いので大ひに問ごつく。／監督の男が来て世話を焼いて呉れたのは／よいがビールを飲みに行く事を強いて二本／のビンを買はされる 1^R 4^Aを拂はされ／る。苦力など四人も来て大騒ぎをする。／実にいやな思ひをする。室には一洋人の／他に誰も来なかったので助かった。三四の／小停車場を過ぎて心持悪るき坐席に／横たわる。／

十六日。夜中頃に室に乗って来た／男は同船の若い宣教師の様に寝たまゝで／見たが朝四時二十五分にBezwadaに／着いた時に起きて見たら矢張り其の男であつ／た。諏訪丸の如クカンファタブルで無いで／はないかとザラザラする柵から下りて／来て曰ふ。他の一人と共に下車した。一／眠りして起きたら日の出前であった。野／の茂みを越へて眞紅の光りが見へ／る 黄の雲の柵引きや其等が水溜りに反射／するのやが実に美しい。／野を越えて大日輪の登るなり黄金の／空に白さぎの飛ぶ。／椰子や棕櫚やアカシヤは矢張り前日／見たものと大した変りも無く温帯的に見／られる。運河がある。洗濯をするもの／運河の向ふ側を白牛の車で行く者、面／白い。禿鷲の木の上に居るを見る。或る小／水溜りには鴻つる(?) や大きさが群れ／をして居る。／室には乗客が増した。ポロンティーエの英兵／一人、洋装の二印度人、米国宣教師、印度人と／英人との相の子の様な男、額に赤の縦線を／引ける、一老人、自分等二人で八人になる。／人種を区別すれば六種になる。／米国宣教師は窓外を指して丘上／の寺院の跡を語りStupaの形に殊つ／て居るものを説明する。此の人等／はWaltair (十二時二十五分) の次の停／車場で皆な下車して自分等二人と／なる。自分一人で食堂に行く 可成り食へる／ものであった。2 R. 円藁屋根の土人の家の赤壁に白線を横に／数段引いたものが此辺の風である。／午后 樹木の少ない焼野を馳る。赤／土の小丘は諸所にたかまる。緑の茂／みが点々として非常に印象的である。／黒い岩の疊々なる丘等が来る。野も／岩石を以て蔽はれる。山羊が岩の上／に遊ぶ 此辺は甚だ熱帯的の感が／増す。其等の物をかすれる斜陽は^(ママ)美しく強い。溜水はコバルト色に光る。／五時頃から初めて北に連山を見る。／日没後のスカイラインと空は何んとも云／はれぬ程美しい。／九時頃 席に赤く積む砂ほこりを拂／つて横になったら一英人が乗った。此男／中々ゲイな男で

嘗て日本に遊んだと／云ってチョンキナなど歌ふ。カフスのボ／タンに仕込んだ日本女の寫真を見せる。／自分等はPuriに行く豫定であったが／マドラスの停車場の騒々敷不愉快と／預けた手荷物の不安心など考へて遂に／中止する事とした。若しPuriに行くなら十時／十五分に着いたKhurda Road Stationで／乗り換へる可きであった。プラットホームには月の／影が冷たい。／

十七日。砂ぼこりを頭から浴び乍らもよ／く眠った。六時頃目醒む。顔を洗ってシ／ャツだけ取り代へる。英人も起きて来てまた／日本の女の事を一生懸命になって語る。八時／頃 フグリ河の支流を渡ってカルカッタに／近かつく。景色はキレイである。／九時三十分Howrah (Calcutta)の／停車場に着く。先づ馬車でRadha /Bazar Stの1 1 1番地なる別所商／会の秋山貞吉氏を訪ふ。案内してもらって／一先づHotel Continental⁴に落／ち着く。直ちに洋服屋に行きあつらへ／る。水を浴び生きかへる。一／睡して昼食する。／日が暮れて夕食前に散歩に出る。宿を／出て右にとって角の所でまた右にまがる⁵。／ホテルの通りなるChowringhee Roadは／大きな商店やホテル等西洋人の経営して居るもの／が殆んど総て、家も大いが角を廻ると同／時 間口一間二間の小店が軒を併べて／居る。藤^{ママ}のステッキの店、サラサの店、呉服店、帽子／屋、手帖の製造所、蓄音機屋など多い。店は／一段高くなつた土間で敷物を敷いて座つ／て居る。幅の廣い巾をダルマの様に頭から具／合好く巻きつけて喇叭を倒さに立てた様／な煙管を座に置いて長い管で煙草を／喫して居る数人のかたまりが実に面白ろく見ら／れた。露地の様な所へ迷ひ込んだ。鍛冶屋／の屋併では暗い中に赤熱の鉄などに向つて／働いて居る多くの人を家毎に見た。或る／町には油で上げ物をして其の香りが其所／等一パイに拡がって居る。夕食後また散／歩する。支那人の靴屋の併んで居る町を通／る。眠られない 永見氏の文章世界に花袋／の“おぼさんのMage”と云ふのを途中から讀／む 案外に面白く讀み終る。今日は終日／曇りで五六月の氣候である。／

十八日。七時過ぎ起きる。朝めしの後ち室／の窓から見へる小さな狭まい露地の様な所を／水絵で画く。十時過ぎ服屋から着物を／持って来て呉れた。クリーム色の一着が27^R 8^A／で出来た。早速着て散歩に出る。シンガポー／ルやペナンに大きな商を持つ居るWhiteaway /Laidlawは此所では一層大きな商店で／宿の併びである。状袋や用紙を買ふ。／絵具屋でワットマンのブロックを買ふ。食堂／で昼食。テーブルに日本人が居った。まだ名を／知らない。食後ミュージヤムに行く。／ミュージヤムの古彫刻は実に素晴らしい⁶／ものである。例のバルートの石欄やガンダラ／の諸彫刻や其他数限りがない。一通／り素通りして他日に譲る。今日は金曜日の／特別日で四アンナスをとる。前の公園の／ボダイ樹の大木の下の腰かけに休む。／青草の原でトルコ帽の少年等がホッケー／を遊んで居る。青年の組、女のテニスの組な／どあちらこちらに美しく動く。公園を貫く／赤い道路には色々な服装をさせた御者を／乗せて涼し相に着飾った西洋の男女が馬／車と自働車で行き交ふ。馬車の後ろにぶら／下る様になって行く印度人の別当を見れ／ば亡国の民の哀れさに打たれる。其等の／間に白牛二頭に牽かれてノソリノソリ行く／荷車の上に坐し

鞭をふったり手で牛の尻をたゝ／いたりしてさも満足相に高勢に歌って／行く印度人を見る。大陽は青草と赤土／をかす^(ママ)れて赤味を増して森に近かよる。／落葉や木の蔭が美しさを増す。ドライブ／の人数は漸々増す様だ。こうして見て居／ると印度人が中流以上の生活をして居る／のは実に僅少の様である。路に行き交ふ／印度人の殆んど総ては労働者か下級の／働き人の様にしか思はれぬ。帰ったら秋山／氏と此のホテルに滞在中の小林氏とが来て／呉れた。(今日朝食の後の果物にホー／ヅキを持って来たのは珍らしかった)／夕食後散歩。ガイヤーティー□ターと云ふ／のでシ子マを見る。見物席は三分の一も／塞がって居なかった。十二時前帰る。／

十九日。朝寝 八時起きる。お茶を飲／んで直ちに二人で前の公園へ水彩を画きに／出る。空は青く晴れて居るが地平線に近か／つくに従って非常にボーッと紅と黄を増／して汚った様に見える。白壁の高い家が輝／やく。ベンチに坐して鮮緑の木と紅の／道路と其れを行く牛車を画く。牛の一群れが自分の／前と後ろを包んで首の鈴をガラン／鳴らし乍ら追はれて行く。十時半帰り其儘／馬車で郵船会社に行く。紹介状(栗君⁷より)／をMr. M. Nagai, Mr. L. Yamamoto, /Mr. M. Seo⁸及び齊藤氏よりの紹介／状 川口留吉氏宛のを渡す。川口氏の／外は皆な居た。山本君と云ふのは計らずも／広島中学の時に二年程下級であった／顔を知って居る人であった。コロポ丸／は明後日來るとの事であった。帰／途正金銀行に行く。支店長西巻氏／に会ふ。和田君より既に話があったと見へて／色々話をする。台湾銀行よりのチェックと二百／ルピーを預ける。一時半帰って昼食後電車／でポーバザールの通迄行き茶に帰る。茶後／水彩の道具を以てまた前の公園に行く。／公園には運動会の様なものがあつた。見物／人の列は其の色々な巾と帽子とが美しき見／ものであつた。フォートに近い所でベンチ／に倚りて道路とバンヤントリーの美しく扇形に夕／空に擴がれるを寫す。夕陽は金に緑草を／かす^(ママ)れる。茶褐色の羊が多く其の下を通る。／一團の田舎の男女が石の手欄にこし／かけて居るのが絵の様である。日全く落／ちて帰る。テニスなどした西洋人の男女が帰／る仕度をして居る傍に印度人が後片付け／などして居る。帰ったら西巻氏が來られた。／自働車で公園の中道を飛ばし橋を渡／り印度人の町(其所には油臭い煙が霞の／様に道路に充ちて居た。夕食の仕度の煙／だと西巻氏は説明する)を通り大分／行つた所で回々教の寺のある所で下車。直き前の／日本人の料理屋に入る。畳敷の座敷が作／つてあつた。風呂に居る。膳が出る。印度人の／ボーイの二人が酒のお代りなど持って来る。／十一時自働車が來たので三人乗る。走ると／稍々寒むい。ホテルの前を過ぎて北に走り／ポーバザーを横切りハリソンロードを横／切り北に進む。此の辺は汚たない町とな／る。月が古い壁の家を輝らす。道を廻／つて帰途に就く。途中アセチリンで門形に／イルミ子ーションを作つたものを多くの人がかつ／いだり楽隊を挟さんで波形に燈を点じ／た棒をかついだり、大鼓やバクパイプを持／つた一隊の後から静々と馬車で来る 乗／つて居るのは若者で桃色の絹を頭に冠ぶり／三四人の小さい女の子が盛装して之れに／乗って居る。供が馬車の後ろに倚って葉の／円扇で之等をあほいで居る。之れは御／婚禮の行列だ。十二時前ホテル前で／西巻氏に別かれる。／

二十日。日曜日。八時起床。朝飯を食／つて少ししたら西巻氏が来られた。前の公園を／横切りエデンガーデンのビルマの塔の前を／通ってフーグリ河畔に出で河蒸汽に乗／つて河を下る。向河岸の棧橋の附近は／ガンヂスの神精なる此の支／流に浴する者が群をなして居る。棧橋／の上は男で下は女である。男も禪の儘で／水につかり殊に女は着けた巾と共に水に沈／む。合掌して居るのもある。船は兩岸を／縫ふて棧橋に着き乍ら下るので時間を／要する。日曜日なのでピクニックの西洋人の／家族等が多く乗って居る。ターミナスの棧橋／に着しカレッヂの前を／通って植物園に行／く。大きな傘形の子ムの樹や睡蓮が美／しい。諸所二ある池では女が体を洗って／居るのが見られた。稍々紫色を帯びた赤い花／が大きな一塊となって萌出た青草の上に／咲いて居る。直ぐな道に向ふ迄つき切る／と其所に一大バンヤントリーがある。其の／枝から地に下りて居る根の数が六百近くある。／ボロンティエの招待会の様なものが其の下で開／かれて居てカーキ色の兵隊が食卓について居／た。二時半頃また汽船に乗り途中で上り／馬車で動物園に行く。初めて見たのは極／楽鳥と云ふ美しい鳥だ。河馬、さい、ばく／など主なるものであった。バンドがあった。四／時半頃より一時間聞く。動物園を出／て正金の社宅につれて行かれ御馳走／になる。二階のバルコニーから見下ろすと邸／内のローンが青く美しい。十時迄居て馬／車で帰る。／

二十一日。朝飯の後ち南の町端れなる／Kalighatに行く。電車の止まる所に池が／在って洗濯屋が多く居た。子供が案内して／マホメット教の墓地に行く。墓の上に靴の儘／で上って寫生して居たので一人の男が非常／な剣幕で怒った。カリガートの寺と云ふのは／何かの祭りの様であった。昼過ぎ帰る。午／后正金に行き西巻氏と共に本屋に行く／A History of Fine Art in India and Ceylonと云ふ三十磅ばかりの本(ママ)の買ふ。夕／食後永見君の発議で馬車屋に裏の方の町を／案内させる。／

二十二日。朝 郵船会社に行く。昨日コロ／ンボ丸が来た筈である。会社の人は誰も来て居な／かったがコロンボ丸の事務長と店で会って直／ちに荷上げ場へ行く。鍵を忘れたので取りに／帰る。少し待たされたが別に荷も開かずに／済んだ。五時頃カテドラルに行く。バーンヂ／ヨンスのステインドグラスがある筈である。／ステンドグラスは美しかった。夜町に出て腰／巻の巾を1^R8^{Am}で買ふ。N君はトルコ帽／を2^Rで買ふ。帰ったら乾氏夫妻が宿／の客間に来て居た。コロンボ丸でシンガポール／から来たのである。／

二十三日 朝飯の後ちクックに行つてダー／ジリング行の事を聞く。郵船会社を訪ふ。また／秋山氏を訪ふ。帰途正金に行つて300 Rupee／受取る。／夜 郵船会社の社宅に招かれ鳥のスキ焼きを馳走／になり、其れから永井、瀬尾、山本、永井夫人自分等／二人合計六人が自働車に乗つてオペラに行く。／カルメンであった。ミラノの役者でCarmenは／Russ。軍人Don JoseはCappelliと／云ふ役者であった。西班牙の血生臭ひ光／景は非常に面白ろかった。Cappelliの声は特二／

美しく思はれた。一時前帰る。ホテルの／大理石の廊下の暗に所に男等が低い寝台／や敷石の上へ其儘横はり毛布を体にまきつけ／てミイラの如く眠って居た。／

二十四日。今朝タゴール氏一族を訪問／する約束があったので秋山氏と小林氏とが／来る。四人で自働車で電車通りを真直ぐに／北へ行く。住宅は中庭を中に置いた／大きな古い建物である。恰度玄関に／入る所でAbanindra Nath Tagore／（美術学校長で画で有名な）氏は自／働車で他へ出懸ける所であった。／二階に通る。A. Tagore氏の兄なる／Gagedra Nath Tagore⁹氏が出て来ら／れた。温厚なる風彩とやさしい語調で／話される。悠たりした着物に跣足へ草履の／様なものを履く。横山氏より託された／紹介状と送り物とを渡す。椅子に倚り／長い管にレースの筒をかぶらしたので／水煙草を喫ひ乍ら話す。／絵と彫刻と古い道具とアジャンタの／壁画の模寫などが壁面に懸けられる。／レプロダクションで見た絵の数種が／ある。大観氏の絵もかけられてあった。／G. Tagore氏は岡倉氏の死を痛み／日本の損失のみならず印度の損失で／あると云ひ、また春草氏の死を甚だ／惜しんで居られた¹⁰。春草氏の海の絵を／見る。座に少々若い此の人の弟が在／り、また画家の一人も居た。古き書物／の表紙なる絵のある板や寺に賣る／絵など見せらる。／話して居る中に骨董屋が佛像／の古い物を数個持って来たのを／廊下に出て見た。他日を期し（其時は／音楽を聞かしてもらふ約束で）家を出／て土人の町を歩く。玩具を見出し／買ふ。昼食後休息して四時頃／ダージリング行の切符を買ふために／Sealdahの停車場に行く。ウキーク／エンドの切符で二等往復29^R 8^A／であった。普通ならば片道でも／27 Rupeeばかりを要する筈だ 甚だ／安い。レザーブして帰る（一等は二倍）。／

※翌25日から南と永見はダージリンへ出発し、29日にカルカッタに戻る。この間の日記は「ヒマラヤ山へ」に詳しい。以下は3月1日以後、日記の最終日までのインド日記である。

三月一日／朝ジエンテンプルと云ふのへ行くためにセルダ迄／電車で行き其所からタキシを雇ふ。テンプルは／或る金持ちの持ち寺と見へる。瀬戸物のモザイク／とガラスと鉄とで造った只だ見世物の様／にギラギラするもので別に何二も見る可きも／のは無かった。自働車を返して河ぶちの／方に行く。小さな河の向ふ側は小さな家／が併んで中々面白い。スケッチブックを出し／て寫す。此の汚水でも水浴して居る女や男／が居る。非常に暑い。立って居ると靴が／焼ける様になる。セルダ迄馬車で来 其れから／電車に戻る。／昼からKidhaporeの日本料理屋で／前の回教の寺を寫す為めに行く。自働車は／心持ちよく廣場の中の道を馳る。窓から／一枚寫し電車で帰る。例の緑の草原／へ来た時にホッケーを済ました青年等が／薄霞の中に立って居るのがキレイだ。男の肩に／懸けて居る青色の中は実にエフエティブに美し／く見える。夕食後町を散歩す。十一時眠る／寝台を変へて呉れたので心持がよい。／

三月二日／朝秋山氏を訪ふたが留守中であつた。／表裏金銀の小扇へダージリングの景色を画

／いて持って往って置いて来た。郵船会社へ／行く。内から電報が来て居た。二月二十六日に／尾道を出したもので電文は／ Mother Baby Heathful (healthful／ならむ) Name Yozo¹¹ = MinamiKeizo／とある。男の子が生れたと見へる。他に花さん／から手紙が来て居た。二十三日頃（一月）書／いたものらしい。／二時頃昼食後一睡する。四時頃／Loudon St 7. の領事館に行く。帰途／廣場を歩るき電車でキダーポーアの橋／迄行き河縁の草の上に坐して向ふ岸／のガッツに多くの女等が石段を上下／し又た浴して居るのをテンペラで寫す。／日が暮れ空が金になった前に菩提樹／が円く枝を張って居り石段の人の黄、白／の着物は特に目に明らかに見へ赤は／沈み、青は美しい。其等が薄暮の霞／の中を静かに上下する。眞鍮の瓶に／水をくむ女もある。今キダーポーア／の方から群衆が帰って来る。電車で／前に坐して居る印度人に尋ねて見たら今／日はシバ神の第一の祭日だと答へた。／二等の方の室は其等の人で満員で大鼓／と手すりかねと鈴とを合せ又た何か其／れに合して歌ひジャンジキドンドンと中々／浮かれて居る一團もある。夕食後散歩／してマーケットを通り抜ける。／

三月三日。七時半起床。午前中博物／館で暮す。此の間寫したMathuraの／Railing Pillarsの女の像は如何にも美／しい姿勢をして居る。クリーム色のサンドストーン／が一層此の彫刻を助ける。一時過ぎ／迄居て帰る。午後は休息。六時前／西巻氏が一寸来られる。夕食前に宿の通り／の恰度裏通りに当る呉服屋の多くある通り／で印度人が上に着る巾（質はカシミヤー／と称して居るが）を5 Rupee 8 Annasで／買ひ腰に巻きつけるのを1 Rupee 4 Annas／で求めて帰る。夕食後オペラハウスの方を／散歩する。

四日。／六時半起床。シヨータを食ってエデンガーデンへ散歩す／フーグリに浴する男や女が多く往復する／朝一寸クック会社に行く。後／ち秋山氏を訪ふ。秋山氏の話では今ま／秋山氏方にある吉田氏（？）（＝□の学校／を出た人）が六日の夜に立ってブッダガヤに行／く筈だ相で自分等も□々六日の夜に立／つ事にして居るので都合が宜敷し。そして／多分七日の夜ガヤにて大谷光瑞伯と／會ふだらうとの話であった。帰途正金／銀行にて預けてある金を受取る。1284／Rupeeの内500Rupeeだけ現金で／受取り残金784は^(ママ)Bombayの正／金へ送ってもらう事にする。午後は／休息する。今夕西巻氏の社宅の／方で夕食を馳走になる様に招かれて居るの／で六時 自働車でオールドバリガンジー／へ行く。牛鍋が出た。食後西巻氏、夫人、／藤木氏、尚ほ他に一人吾々二人合計六／人が自働車でチョーリングーの直き裏なる／Elphinstone theatreに活動寫真／を見に行く。二階から見下ろすと種々の／人種が其の面色、服装の異なると共に／入り乱れて居る。恰度眞向ふに当る／二階のボックスの様に拵へてある一間に／は白い薄い布が段帳の如く張ってあっ／て其の内に印度人の女が坐して居る。／此の直接に人に顔を見せない婦人を／Zenanaと呼ぶ相だ（深窓の／婦人と云ふに同じ）。西巻氏から／印度人種の事を聞く。白い（レーズなど／の入れる）小さな帽の男はベナーレス附近／の風俗。頭に大きく布を巻きアゴヒゲを／生やし繻のチョッキを着、大きなステッキ／を携へて居る美しい風俗の者は／Kabul（アフガニ

スタン人) 又はPathan/である。Kabulは多く高利の金貨をして/居て非常にキツイ性の種属である。印度人/とよくけんく□をする 彼等が二人で町を歩る/いて居るのを能く見受けるのは万一の危険/の時を用心する為めだ相だ。パーシー/と云ふのはボンベイ附近を中心として居て/六七万居る。之れは古ペルシヤ人が移住/したものでペルシヤ人と印度人との合の子/が今日のパーシーである。宗教はゾラス/タリヤンで鳥に死体を食べさすのである。/彼等は神の造りし土を汚す事を恐れて土/葬せず、神の造りし火を汚す事を恐れて/火葬せず、神の造りし水を汚す事を/恐れて水葬せずと云ふのだ相であ/る。十二時頃はねる。場の前は/自働車馬車が満ちて居る。一寸原の傍/を散歩して帰る 廣場の樹木の下、往/来の隅には土色に汚れたる布を^(ママ)紛ふて/臥して居る人等を見る。/

五日。日曜日。/今朝秋山氏を訪ふたが恰度行違ふて/会はず宿に帰って待つて居たら来られた。/一緒にダゴール氏の邸を訪ふ。Aタゴール/氏(美術学校々長)も居られる。小さな/水彩画のスケッチを見せらる。皆なワット/マン十六切位から端書半分位のもので/理想画或は芝居のスケッチ(自分等/兄弟が数日前自邸に於て演じたる/所を)及び山などであった。Gタゴール氏は相変わらず温厚なるニコニコ顔/で悠くり話される。突然自分の喫して/居る水煙草を吸つて見ないかと云ふ/試みて見る プンと一種の香り(此ノ香り/は印度人の町を歩るいて居ると必ず/鼻に来る香に似て居る)が来る。左程/キツイ煙では無い。ゴロゴロと水に音が/する。自分と永見君にカンドルを一個/宛呉れられた。自分のはプリの寺院など/に用ひる式のもので勉學を意味する/ものだ相だ。大観氏にとて白の上衣と/ズボンの如きもの、及びA氏の着古るしの帽/三個(白の僧帽、金線のもの、カシミヤー模様/のもの)を預けらる。一時前辞し帰る。/午後四時前に永見氏はカリガートの方へ/寫真をとりに自分はダージリングのスケッ/チを持って郵船社宅へタキシで行く。/恰度出先きであつたので玄関で話して/帰る。永見君はカリガートから絵を得て/帰る。明日出立の豫定なので荷造/りをする。夕食後前の原のレッドロード/をタキシでドライブして一巡し帰る。/十二時迄荷造りをする。/

六日。今日は愈々カルカッタを引き上げるの/で忙しい。郵船会社へ行って荷物四個/ (大行李、小行李、スーツケース、イーゼル袋)を頼/^(ママ)んで置く。昨日入港した仁川丸で神戸/へ帰り返してもらふ様にする。/正金に挨拶に行く。朝 秋山氏の所に行/く 丁度多忙なので店の他の日本人の人に/一緒に来てもらつてクックに行き切符を買ふ。/Gaya、Benares、Agra、Sanchi(Agraから/Sanchi往復)、Delhi、Bombayの□で/二等九十ルピー、之れにServantの三等賃三十/ルピーを要した。尚ほServantを一人雇つて/もらう。サーバントの名はモンモットハーンと呼ぶ/英語を話す。午後宿に来る様に命ずる(彼れ/の今迄の主人等からもらった証明書は別所商会/秋山氏の方に一時預つて置く事にした)領事館に/行って先日頼んで置いた証明書をもらつて/来る。夕食の時にボーイ等が自分等の立つ事/を知つて群をなしてテーブルの周囲に立つて/動かない 頭に二ルーピーを與へる。八時に/宿を立つ。ハウラの停車場には恰度他の汽/車

が発する所で非常な人である。頭からスツ／ポリ絹を冠って面を陰し足に重たい程に金環／銀環をはめた所謂zenanaの数人が歩む。／西巻氏と秋山氏とが見送りに来て呉れられた。／新しく雇ったサーバントは汽車のシートへ毛布を拵／げたり枕を併べたりする。九時二十分過ぎに／発車。女を交せて数人這入って来たのでコチャ／へ／する。

七日。／Budda Gaya／目醒める。未だ暗い。五時いくらにGayaの停／車場に着いた頃は既に明かるい。食堂に入っ／てチョータを食べ手荷物を預けて古い馬車で／Budda Gayaに向ふ。古いGayaの町は中／々面白かった。家々の入り口の戸や扉の枠の／彫物は甚だ愉快に感じた。町は案外に／長く続く（人口七万と云ふから町は大した所で／は無いが人口から云へば中々の大都である筈／である）店先の子供が手の上に小鳥を止まら／して居るのを見かけたが少し行くと歩んで居る人／がまた手に小鳥を止まらし同時に食事壺／二個を同じ手に支へて居る男を見た。町端／れの白い塗りたての塔に緑色のインコが／数羽止まって居たのはキレイであった。町を／出るとマンゴや他の併木が続き道路は／乾き切った赤い灰の様に浮いて居る。子供等／が尻へ其の土をくつつけて遊んで居る。煎餅の様に／平らたく干した牛糞を籠にうず高く積み重ねて／運こ(ママ)ん居る女が居る。町の右手（西か）に赤土に／岩の凸々して居る小山（ガヤ山?）があつて頂上／に小さな白い堂が見へる。下から石段が築かれて／あるのが屈曲して居たりアーチの下を潜ったりし／て居て面白く見られた。野には二人相併ん／で同じ運動を繰り返してはねつるべで水／を田にやって居る。左側は河の様な白砂の／原で大きな木の下で村民が数十人寄り／集まって市場を開いて居る。子供が何んとか／云って自分等の馬車を追いかける。銅貨を／投げてやったら其れを獲た奴は飛んだり／はねたりして悦こんで居る。女の子がまた追ひ／かけて来る。限りが無いのでやらずに居たら十町／位走って来て遂に思ひ切った 可哀想に思っ／た。砂ほこりを除いたら道路は向ふ迄／甚だ宜い。塔が見へた。Budda Gaya迄／七哩ある。ダラダラ上って行くとまた一段／低くなる。其所に大塔が建てられる。塔／塔は九階で丈の高い曲線を持ったピラミッド形である¹²。／の前の両側に色々な小塔がある¹³。古色を帯び／た形のよい像が壁の内側に塗り込められて／ある。本尊は顔など彩色がしてあるので古い／ものか如何か少しも分からない。階段を登って／塔の四周を巡る廊下に出る。一尺位な塔が／沢山併べてある。／釋迦が其の下に坐したと云ふ神聖なる菩提／樹は塔の眞後ろにある。今の木はまだ古く／ないものでビルマ人が植へたのだと云ふ。塔／の窪地から上って前の墓場の壁内に入る／其所に堂があつて釋迦が結跏趺坐／したと傳する直径四尺位な彫刻した円形／の黒い石の金剛坐がある。大塔の左手数／十間の所に蓮池がある。参詣者の多くが浴／して居た。池の周囲の土塀を超へて野が／見へる。水蓮の葉と水草が浮いて居る。／此所にある佛像の或物は可成り古く且つ／美しいが多くは古壊された。此所で最／も見るときは阿育王に依つて造らると云ふ／赤色の玉垣である。之れも大破して残っ／て居るのは直立して居る部で横のものは／少しも無い。蓮花模様や動物模様など／ある。墓の様なもの、多くある辺に『日本開闢来／金（?）坊詣る 釋尊墓前 明治十六年道龍／二月四日』と石に彫り附けて建て、あるもの／があつた。丘の様な所には彫刻され／た石辺が多く積み重ね

て鉄柵の内に／置かれてあるのがあった。後ろにゾロ／＼／従って来た男の一人が彫刻の石像を持っ／て居るからと導く。此の辺の家のはねつる／べの重りには立派な彫刻した群像／の石などがしぼり附けてある。村の／家に往って見たが大したものも無い。負けると／云ったが中々負けない。馬車の居る所に帰／って再び買ひに行かうと思って出かけると矢／張り後ろに従ひて来て居る巡査（政府の／巡査では無く村で造って居る巡査の様な／者）の一人が賣る事は禁じてあるので若し／買ったらつかまへると笑談の様に笑ひ乍ら／云ふ。面倒だから馬車に乗る。村を出て／数町来た所に老人が待つて居て肩かけの下／から石片を出す。ールピーで馬車の内へ積／み込む。Gya^(ママ)の町に近かついた所にタン／クがある。建物や石階が面白い。停車／場に帰って馬車賃三ルピー十四アンナを／やる。昼食して待合室で四時半頃迄居／て散歩に出かける。ガヤの町は中々愉快／だ。女の一群が盛装して歌って歩るい／て居る。婚禮の行列だと云ふ。バグパイプ／や喇叭を持った楽隊などが先の方に／居た。町の小さな家の往来に沿った一／段高い廊下の様な所に子供が二十人／ばかり集まって何か口を揃へて言っ／て居る。学校である。一人の子供が音戸をとる／と多勢が後とをつける。神の名を云って／居るのだと供は云った。夕食を済まして／七時五十八分の汽車を待つ。汽車は／来たが二等は只だ一室のみで満員の／様だ。幸ひ人の居ないインターメディアート／があったので其れに乗る。サーバントは／床の上に横はる。／

八日。Benares。（古名 婆羅奈斯Varanasi）／夜中の十二時四十分Moghal Sarai／の停車場へ着く。此所でBenares行の／汽車を待たなければならぬ。ウェーティング／ルームの暗い所で五時迄待つ。寝台も／あるが一個しか残って居ない。N氏に譲っ／て椅子に依る。非常に大きな声の蟋蟀／が室内で鳴いて寝られない。其の声は室に／響いて鳴る笛位である。汽車に乗り僅／か四十分で既にガンヂスの鉄橋を渡り／Benaresに入った。Benares Cantonment／Stationに着き馬車でCantonmentの／中を通してHotel de Parisに入る。／宿は四方三町位ある庭の中に平屋造りに／造られた大きな家で室の前のアーケードの／所に馬車が来る。チョータハジリを食べ／着物など着代へる所へ大谷光瑞伯が／従者の青年と二人で着かれ隣室に／入られる。ガイドをニルピーの約束で／雇い直ちにSarnathに行く 美しき部／落とマンゴ、榕樹、／菩提樹、イミリー（イミリーはヒンドゥー／スターニして英語ターメラン、＝アカシヤの類／か）の併木の下を朝風に心持ちよく／進む。マンゴの木は今ま花盛りで香気／を放って居る。Sarnathには五哩ある。／左手にマホメダシの王とかの塔を見て／直きにサルナーズに達する。馬車を下りて／小さな、然し心持ち好く建てられた博物／館に入る。此所に有名なAsoka王の／建てた記念柱の頭頂の四獅々の彫／刻がある。大きな石の天蓋、無数の佛／像が陳列されてある。瓶類、玩具／土製の頭などがある。瓶の内に貝／の□せられたのもある。直ち横の丘に／登る 新らしきゼーンテンブルの横を通して／サラナーズの塔の傍に行く。塔は大きな／円形の物で模様の彫刻されたる石／を積み重ねて作らる 上部は殆んど／心ばかりで外皮を残さないが下の方は模／様がよく見られる。政府に依って修繕が／してある。直き横なる、釋迦の初めて／Budda Gayaより来たり説法せる／鹿園の跡を見る。発掘された／所に煉瓦や石の宮殿の部分を見る。／石柱や入口など諸所に

見られる。大きな規模のものである。アソカの建てし柱がある。発掘された凸凹の土地の石片の間にアザミの如き葉を持てる黄色のバーラバーアンラの花が日に照されて咲く。石を疊んだ上には徑三分位な淡紫の可愛い朝顔の如き花が匍って居る。(案内者はサラーンは鹿でナースはプロプリエターだと云ふ)。来た路を引返す。暑くなって来た。十時頃に宿に帰り朝飯を食べる。疲れ切ったので眠った。サーバントが起こすので非常に苦しみ乍ら目を醒まして二時過ぎ昼食を食べ馬車が待つて居るので直き出かける。一タンクの傍に建てられたるDurga Temple (俗称Monkey Temple) に行く。小さな寺で猿が数十居る。直き其の横に仙人行者の大理石の墓と其の人の大理石の像とが安置してあるのを一寸のぞき町に行き本通りで馬車より下り狭まい通りを下りて一寸した廣場方庭に出る。此所にGyan Kup (Well of Knowledge) と称する井戸がある。古回教によりて佛寺が攻められた時に佛が之れに飛び込んで助かったと案内者は云ふ。参詣者が此の水を戴きに行く。直き左手にThe Golden Templeがある (Bisheswar (Shiva)) を祭る。狭まい通りの石壁の穴からのぞいて見ると多くの人が参詣して水を顔につけて居るのなどが見られた。此のテンプルの前面の狭路に出て恰度前の建物の二階に上って金の塔を見る。ムニテンプル、Sanicharの殿堂など、と云ふのが附近にある。また神聖なる牛、豚、山羊、孔雀などを本堂の周囲にグルリと飼ってある寺がある。仙人? (ハーシット) の寺と云ふのが其の横にある。其所等は小さな寺を以て充満して居る。尚ほ其の附近には眞鍮の佛像、佛具、石の彫刻、人形などを賣る小さな店が併ぶ。町に出てまた稍々狭まきバザーを歩る。眞鍮細工は此土地の名物で家ごとに賣って居る。一二の家に案内者はつれ込んだ。本通りを廣場に美しい鳥を多く賣って居る群れをのぞきタウンホール、病院、クエンスカレッジ (ゴシックのよい建物であった) の前を通って五時頃帰る。少ししたら大谷伯も河を見て来たと言って帰られる。大谷猯下の話を聞き乍ら広い食堂で円テーブルを四人で圍み食事を済まし、弦月の下に庭園を歩るき乍らヒマラヤの植物の話しやまた印度の果物の話しなど伯から聞く。十一時頃迄起きて居たが蚊が非度いので寝る。犬が甚だ鳴く。今日の昼の温度はアーケードで八十八度であつたがポーッと蒸し暑かつた。

九日。六時にサーバントによって起こされる 茶を飲んで居る間に馬車が来る直ちにガンジス河に向ふ。朝の涼風は車上で甚だ心持ちがよい。中央に位するDasaswamedh Ghalに行く。行者が法螺貝を吹き鐘を打ち鳴らして居る。石階の上からガンジスの岸を眺める。何んとも云へない眺めである。すげ笠に柄をつけた様な傘を諸所に立て、小屋を拵へ多くの人が浴する其の眺めは愈々印度だと思はせる。キレイに彩色した屋形船を雇ふ。屋根の上に藤椅子が置かれ我々を待つ。老人と壮年と三人で漕ぐ。岸を離れて先づ河上の方向に進む。此の高大なる石階の眺め、上には色々の形の塔、巡禮者の為めの家が面白ろきスカイラインを画き、廣き変化に富める石階に上下する男女の衣の色彩。水際に沿って設けられたる多くの小棧橋、之れを蔽う大傘、(スゲ笠) 其の間に神聖なるガンジスの水を浴する人。赤、黄、緑、白、手足に光る銀環、礼拝せる人の傍に置かれたる磨き上げたる眞鍮の瓶、或る部は富

者の群、或る部は／寡婦の一群、達磨其儘の形に祈念せる／老人など極美である。朝日は之等の人を／照らし暗緑の流れは岸をしたして悠るく／流れる。チャタラガ Ghat Raja Ghat、Kedar Ghat、／などが順々に自分／の前に開展して来る。船を引き返して下流／に漕ぐ。Manmandirの天文台の下には／同名のGhatがある。写真でよく見る二台の細／長い高塔を持つモスクは空を突いてPanch／GangaのGhatの上に見られる。船を岸／に寄せてモスクの高塔の中を螺の尻の如き／階段を登って頂上に出る。ガンヂスの淡緑の／流れや、小さき船や町や塔や其の間を低く／飛び交ふ鳩やインコを見、河の反対の方向／遥かにSarnarthの塔を眺める。下りた所／の庭に行者の針の寝床を見たが行者は何所／かへ行って居らず其の老妻が其の傍の家の内で／佛像の様なものを賣るのか併べて居た。また／舟に乗り少し河上に帰ってナプールの寺を¹¹／見る為めに上る。其の建築は此の辺の他の建／物とは全く異なって居て余程支那式に出来／て居り二重の屋根は甚だしく極東のものに／似る。柱や戸や木材を多く使って細かい／彫刻がほどこしてある。長く外に／突き出た軒を支へる為めに造られた斜めの／支柱には各々春彫刻が作られてある。／自分等が此の寺に登るのを見て恰度水際／で礼拝して居た此寺の僧は上ってやって／来て竹で其の一つ一つを指して行く。河岸／に低く小堂があつてガンヂス（の神像）を祭／る。大きな像（然し甚だ僿末なる）の足を／前方に突き出して坐して居るのはガンヂスの／子の像である。水に近かく極く小さき石／の堂に漸やく坐するだけの内側に僧侶か／坐して下に浴する人を見下ろす。タールケス／ホアのテンプルは其の附近の廣大なる建物／や石段と共に傾むい水に半ば沈んで居／る。彼の火葬場なるJal Sain Ghatは／此の附近で今も三四の白布を以て包まれ／たる死体は積み重ねたる薪の上に足を河に向／けて置かれ或ものは煙を上げて燃へつゝある。／石段の上には其の死体に関係ある者等が之／れを眺める。焼かれたる灰は總て此の河に／流される。此のGhatは最も神聖なる場所／で死体の焼かれつゝある直き附近のガット／には水浴の人が充滿して居る。白布を以て／蔽はれたるは男にして赤布のものは女である。／ハジヤーラと称する千燈のお燈明台は諸／所に建てらる。何所の寺からか賑やかな／奏樂の音が来る。初めのGhatに上り／ニルピーの舟賃と八アンナの酒手を呉れて石段を／登る。昨日通つた町を通り帰つて朝飯を／食べる。大谷伯は既に今朝ラクノーへ向／けて立たれた相だ。休息する。午後も／何所へも出ず半日慰勞した。夕方附近の／町はづれを散歩した。何んとか云ふ小さな／河の上の橋に来た時に星がキレイに水に反／射して居た。路に幻燈でキリスト教の絵／をうつし印度語の讚美歌を歌つて／傳導して居る印度人があつた。夕食後 前／の庭を散歩する。月は五日位であらう。樂隊／の音が聞こえて来る。荷物を片着けて／十時半頃寝る。（一泊六ルピー）／

十日。朝五時半起こされる。茶を飲ん／で七時半の汽車に乗る。プラットホームで／例の動く石を買ふ 印度語でPathar /Ka Kaleja (Pathar=stone、Ka=of、^(ママ) /Kareja=live) と呼ぶ。／ 汽車はガンヂスの鉄橋を渡る。朝日／を浴びたベナーレスの町は白く暖かき色に／深い青色の河岸に持ち空のバラ色と共／にモーツとする。さらばベナーレスよ。／モーガルサライの停車場で乗り換へる。野／は漸やく乾き切つた砂地となる。綿、麦／の畑が砂地に連らなる。砂漠

の如き焼／野の諸所には坭を以てこね上げて恰／も土堀だけの如き農家が見られる。／暑くなつて来る。十二時より二時三時迄は／蒸される様になる。腰かけの黒草は／日が当たらないのに焼けて来た。扉の／とり手は熱して居る。賣りに来る果物も／種類が変わって来た。葡萄、ナツメ、ホーツキ、／印度名アムルート（英名グオバ）と称する馬／糞臭のある甘いものを賣って居る。十二／時にガンジスを渡りアラハバッドの町と／Fortを美しく眺める。砂野の併木の／下の路を砂煙りを立て、行く牛車の一隊、／駱駝に荷を運ばす人等を見る。三時を／過ぎたらさすがに少しく暑さも鈍って来た。／諸所に水溜まりを見る様になって鳥類が／非常に増した。大きな丹頂の鶴（印度／鶴にて頭部全部赤茶で体は少々灰白／色を帯ぶ）のつがひがあちこちに立っ／て居るのは美しかった。鴻は鉄道の直き／下の水溜りに汽車を恐れずに立って居る。／イビスが飛ぶ。或る原には孔雀が／悠然と歩るいて居る。野生の孔雀は初／めて見た。緑、金茶、黒、斑の小鳥／は其所等中を飛び廻って退屈を／忘れさせる。鶴が夕に近い空気の中を／大きく羽ばたきして二羽飛んで行くのは絵／其の儘である。Tundlaの停車場へ／七時五十分位に着いて乗り換へる四十分か／りでAgra Fort Stationに入る。宿引／の三四が来た。此所で宿引から和田三／造君がメトロポールホテルに来て泊って／居る事を知って其宿に行く事にする。宿は／停車場に近い。和田君は不意を食／つてびっくりして居た。夕食を済まして二／時迄話して眠る。／

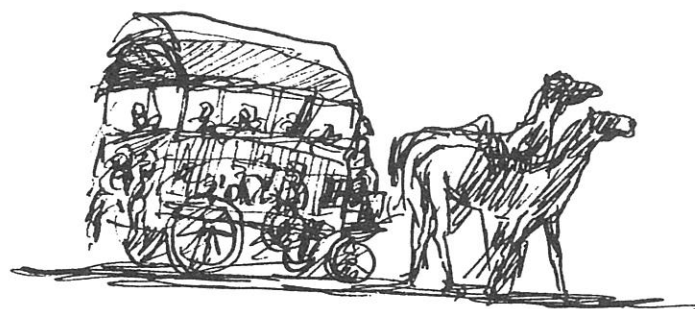
十一日。起きてアーケードに出ると前庭／の林の上を緑色のインコが其の長い尾を／引いて多く空を飛び交ふのが美しい。何ん／とも曰へない光景である。朝食を済まし／て和田君も共に停車場の直き傍なる／Jama Masjidを見に行く。其の附近は／市場の様になって居て面白い風俗の群／集が行交ふ。それからTongaを雇って／河向ふのItima-ud-daulah／の墓に行く。墓は有名なもので其の小ジン／マリとした石大理石に色々な大理石で象嵌した／のは高尚で心持がよい。殊に其の窓の細かい／大理石の格子は非常な優美な心持ちを／與へる。總て印度建築の重々しいのに比し／て甚だ華やかで清らかな感がする。前後／左右に廻らされた芝草の緑に對して非常に／美しい。凡てが直線で出来て居るのが実によい／感じがする。段を登り内に入って各室に置か／れた墓石を見た後ち此の墓の主なる／Ghiyas Beg（パーシャン）夫妻の黄色大理／石の墓の室に入る。白い花が墓上に置かれ／下に線香の煙が上りよい香気が室に満／つ。此のGhiyas BegはTajに葬られた／名高き皇后Arjmand Banu／（Mumtag-i-Mahalと□され／皇帝Shah Jahanの皇后。美人）／の祖父に当る。／門を出ると往來の向側に大理石の象嵌の／皿や小箱を賣る店がある。六アンナの箱二個／を買って三四町先のChini Ka Rosaに／行く。此の附近は砂の乾いたる小丘があつて家が／如何にもアラビアなどを思はず様に建てられ／てある。Chini Ka RosaはJumna／河にのぞんで建てられた廣大な建物で半ば／壊れて居る。其の建物の壁に残るハ－シャ（ママ）ンタイル／の様な塗物は美しいウルトラマリーンや青から／出来て居る。河に面した壊れかけた手すりによつ／て其の附近の古い建物を見るとたまらなく／思ふ程よい。直き近かくには井口に女が二人／水をくんで居た。明日画きに来るつもり／にして歸る。路に砂ほこりが立つ。赤き巾に／包み花環を上に乗せ男によつてかつが／れ何か歌の様なものを歌ひ乍ら行く／死者に會ふ。

焼かれてガンジスの支流な／るJumnaに流されん為めである。休息。／六時に馬車が来てTaj Mahal
に行く。／イミリーの茂みの間の路を行き赤色の建物／の間、大きな門を潜るとTajの白い塔は
／見へる。漸やく日は暮れて／バラ色の余光が其のドーム左側を軽く照らす。／前の整然たる水
溜まりに映つる、／門のアーチを通し濃緑のサイプレスの併木を両側に／控へ其の間に優美に立
つ其の姿は夢の／様である。寫真で見たるよりも遥かに／和らかく親しみ多く美しい。水際の／
石を傳つて中央の一段高い所に上る／其の上の池には小魚が飛んで赤い西／の空が反映する。一
團の人が眞白な／大理石の腰掛に坐する。／黒と白の大理石で敷きつめた廣／いプラットホーム
に登り入口に入る。日は漸／やく暮れて内は暗い 白衣に赤の帯を肩／にかけた番人の一人は燈
籠を提げて／内を案内する。嘗ては銀の扉(ママ)であて今ま／木扉となつて居るのを指す。中央のドー
ムの／下の眞中(ママ)にはアルジマンドブナ皇／ 後の墓があり其の隣に偏して¹其れよ／りも大きな此
の建設者なるShah Jahan／皇帝の墓が置かれる。此所に番する老／人の番人等は墓上の香の高い
木の葉を呉れる。燈／籠を持った男は其の墓石、壁面に美しく／象嵌されたるメノウ、緑石、青
石の花模様／と石大理石の花の浮彫を示す。説明／する声は反響に反響を重ねる。老人は／経の
文句の如きものを呼ぶ 反響は四／圍を壓する。稍々入口に近かく下に行／く穴がある。燈籠を
携へる男はキラキラ輝／やく白石の段々を照らしつゝ下に降る。／其所は皇后、王の眞の墓石が
ある。美／しく造られたる模様は上のものと同様／である。嘗てダイヤモンド、ルビーなどの宝
石／で飾られて今ま無い事など説明する。／プラットホームを背後に廻る 其所には／Jumna河が
広く眺められる。日／は暮れ終る。前庭の水の附近に坐／して歌ふ若者の数人がある。／月に照
らされて帰る。／和田君は午後五時頃フアテプールシクリ／に向つて立つた。今日午後宿の庭へ
／熊使ひや蛇使ひがやつて来た。蛇使ひは／コブラを籠から出し瓢箪笛を吹く。両頭／の蛇を三
つ持つ。両頭の蛇は六ヶ月毎に／其の尻と頭とを交互に生ずと云ふ。サソリ／を持って居た。／

十二日。日曜日。朝飯を食つたらトンガ／が来て待つ。直ちに昨朝見に行ったチミカロジャ
に絵を画きに行く。チミカロジャの河／に面したアーケードの様な所に立つと河風が／涼しく吹
いて来る。直き南に一つの壊れかけた／塔があるのを寫す。前の低い場所には井戸／があつて眞
鍮や赤土の水瓶を頭に戴せた／女が多く来て水をくむ。水牛の群れを追つ／て河に水を浴びさせ
に来るものも見受け／られる。チミカロジャの番人がバラの花や蜜／柑を持って来て何かと世話
を焼く。画き／終つて他側の芝草に坐しチミカロジャの／大きな建物の壁面に美しく残るペルシャ
／タイルの如き塗物の模様を眺め乍ら一／枚画く。孔雀が直き背後のイミリー／の木に飛び来たつ
て去る。馬車が迎かひに来た。／番人はまた紅のバラの花と紫の小花とを／たばにして呉れる。
夕暮にタジマハルを遠／くから画かんとしたが余りに早やく日が暮れ／たので画き得なかつた。
煙草に酔つて／夕食を廢した。／

十三日。朝食後再びチミカロジャ／に画きに行く。初め画いた小塔の内から／村を画く。終つ
て河ふちに下りチミカ／と其の下の水ふちに人が群れて居るのを／見乍ら画く。帰途イチマツド

ドラの前の／大理石の細工の店に入って冷かす。帰ったら／三時前。和田君がフアーテプリシクリから帰／って来て永く待って居たが遂にデリイに／立つために停車場へ行ったとサーバントは／云った。／夕食を済まして散歩する。月は／大分大きくなって来た。Fortの附近は／砂煙がポーッと立って居て霧の様／でFortも霞んで見へる。ポーッと／した中をトンガや御輿の様な此土地の馬車が／燈をボンヤリともして過ぎ去る。特に／今夜面白く見たのは駱駝二匹によっ／て牽かれる二階式の車で其の内には子供／や女や男やが三四十人も乗り込んで居た。／其等はノッソノッソ悠然と砂を踏んで／行く 駱駝に引かれて村に旅する人の／群れである。此の車が四台Fortをバツ／クにして過ぎ去った。暗い大きな燈が／車の横に懸けられる。車の背後には二三／の男が腰をかけて水煙草を喫む。駱／駝の側には二三の人がついて行く。多分／朝夙く此の都に来て暑き日中を避け／月影を踏んで夜路を行くのであらう。／



十四日。五時四十分起床。支度して停車場に／出でFatehpur-Sikriに立つ。少し遅れ／相なのでトンガは非常な勢で町を走り／停車場二向ふ 後ろ向きに乗って居るので／道路を下に見ると目が廻り相だ。恰／度出発の間に合ひ車掌に話して切符な／して飛び込む。一時間ばかりしてFatepur^(ママ)／Sikriの建物が赤く丘の上に見へた。／古の都市（今は畑）を圍む高い石壁の／一部の壊れた間から汽車は内に入／る。停車場は直き丘の下につく。宿／から造って呉れた辨当箱を苦力の頭／に乗せ一少年のトルコ帽が案内して／赤石の塊をゴロゴロ踏み乍ら登る。／Naubat Khanaの門を潜る其の路は遥／かに東Agraに達する。二門を潜って右の／丘上に新らしく建てられたるダックバンガロー¹⁰／に入って一休みし直ちに背後のMint／（造幣所）の跡（円屋根が連続して四方／を圍り中庭が広い）を通り突当りの／入口を内に入らんとして壊れたる宝庫がある。入口の内は石で畳んだ中庭は左右に／延びて正面にDiwan-i-Amの建物／が見附の如く控へる（王の□の場所に出で／面接せしかと思はる）石の廊下は中庭の／四圍を廻る。石階を登りDiwan-i-Amの内に入り背後に抜けられる。／また中庭があって其の右に寄って／Diwan-i-Khasの小建築がある。／中央に只だ一本の柱が立ち其の□の頭／部には美しく彫刻された六十四の肘木（腕／木か）があって上に十字形をなした石の廊下／と円き場所を支へる。上に登る。細かい／彫刻の欄かんが狭まい橋形の廊下／に取り付けられる。壁間の石階を／上に登ると屋根に出る。此所からは／下に遥かに連続する西、北の野を／眺める。此の建物の下は崖をなして／雑木が生じ多く

の孔雀は羽音高く／飛んで向ふの丘の角に去る。村や、／白い道や、イミリーの併木が見へ／驛馬の一群に荷物を負はして行く者などが／見られる。Panch Mahlの建物は／如何にも木造建築かの如き形で中庭／の西に峙つ。赤間ヶ関に似たる、此の石／の建築の一連続は一つの緑の草の色も／混ぜずに清く乾いて見へる。南に寄って／四辺形の池があり中に座が設けられる。／之れに沿って南側に皇帝Akbarの／Khwabgah=“House of Dreams”なる／寢室が二階の如く建てられる。池の東に／は小さき一つの建物、然し非常に美しく／内部に彫刻されたる“Turkish Queen’s／House”がある。トルコ風呂は石段を／下りて東に位して建てられる 暗い内部に／入ると大きな蝙蝠の多くが驚いて飛び／交ふ。其所等の外壁にも孔雀がとまって／息んで居る。Jodh Bai’sの宮殿を／後ろに廻り美しきBirbal’s Houseの／細かい彫刻模様を紙に敷き寫し／馬と駱駝の厩やを通り今ま村の小／學校になって居る建物の前を通り石橋を／上り門を潜って正面に礼拝堂を持つ／Graveyardに入る。多くの墓石が右に／見られる。赤い石の建物の内に只だ一つ／Shaik Salim Chishti’s Dargah／が石大理石で造られ輝やく。内にはあわび／細工の墓石があつて巾を以て蔽はれ番人／が居る。グルリに圍らされた高い外壁の／南部に高くGate of Victory (Buland／Darwazah)が峙つ。其の外に西に当／って八角形の大きな井戸 (Bāoli) が／黒い水に緑の浮草を浮かばして居る。／自分等の往つたのを見て子供や若者の／十数人がやって来て裸になって数丈／の壁上から之れに飛び込んで見せる。／数人に一パイづゝやる。此のヤードに／入る門の所へ来たならキレイに着飾つた／男女子供の一群れがあつて女は大きな／皿にカレーライスの様なものを造りつゝあつた。サーバントはあれは遠くから此の寺に／詣つて来た人で貧民に施すために造つて／居るのだと告げる。ダックバングルーに帰つ／てソーダを飲みサンドイッチを食ふ。ベラン／ダに椅子を持ち出して西北の風を悦こ／んだが其の風も漸やく熱して来たの／で室に這入り一眠りする。後ち／Mintの一部に坐して水彩で画く。／暑くなつて来た。三時に汽車があると／云ふのでバングルーを出る。バングルー／は休息料を一人四アンナとつた。／暑い路を下に下る。丘の下を通ずる路に／は駱駝を追つて行くものがある。停車場に行／つ見たが自分等が便乗して帰る可き／貨車が来ない (貨車の車掌室へ一等の運賃／を出したら乗せて呉れると驛長が初め／に教へて呉れたから)。停車場から裏に／見へる美しい眺めを水彩で初める。貨車／は五時頃に来たが大して次の客車と／時間が異なる様なのでやめて八時／半の汽車を待つ。他に一枚画き／終つた頃 日は暮れかけた。月が美しくプラットホームを／照らし出した。多くの村人が其所に坐し白い着物や／頭の中に月影を浴びて語る。汽車は来た。野／の砂の中を汽車はAgraに向つて走る。今日／昼頃から焼けて居た村の火事がまだ止まらず／西の方の空を赤く染めて居る。Agra Fort停車場／についたら宿の男がトンガを持って迎ひに来て／居た。／

十五日。今日は永見君をアグラに残して自分だ／けサーバントを連れてSanchiへ立つつもりである。／夕飯を早やく作らして七時十分にカントンメントの／停車場へトンガを走らす。ガリヨールなどの停車場／は知らぬ間に過ぎてジャンシの停車場について／居たのを夜中に知つた。／

十六日。Sanchi/Binaの停車場に着いたので茶を飲む。十二時／頃にBhilsaの岩の小丘の上に塔や建物の／跡を高く眺め丘下に赤屋根の人家などがあって／美しい小村を形造って居る。次がSanchiの／筈である。暫らくすると左手の丘上に大／きな塔が円く鍋をふせた様に見へる。其の傍に門が／見へた。停車場は至って小さい。査巡が荷を持って／行く。小路を三四町行くとダックバンガローが／ある。先づ入って上衣をとって顔を洗ひ、水／を飲む。印度へ来て初めて生ま水を飲む可く余義／なくされた。カレーライスを番人に命じて置いて／持って来て呉れた印度式の寝台に横たわる。／前の森に鳥がさえづる。其所に初めて聞く／美しい鳥の音がする。外に出て梢を仰いで見／たら黒頭赤身の鳩大の鳥が二羽、頭を交／互に動かして鳴いて居る。供に尋ねたら印度名／ポットリーと称する鳥だと云ふ。暑いので四時半／頃迄眠る。見物に坂路を登る。今ま多くの土人／が其の路を上下して修繕して居る。此の附近に／特に多く見かける眞赤な着物の女等が土を籠／に入れて頭に戴いて往復し自分の来るのを／見て立ち止まって布で顔を陰す。一つ大きく折／れ曲って丘上に至る。直き眞向ふに大塔と／北門が見られる。小さな尺余の塔が地に／併べられる。大塔に至らぬ前に左側に／最近に修復された小塔が一つの門と諸所／に古い石を混じて新らしく見へて立つ。大塔の／前に進む。北門は最も美しく且つ完全に遺る。／象と乗手が柱上に冠せられ、右柱前面、階段／と手欄、内面には塔、木、猿を拝する人等、／左柱前面、拝木、行列、泉水、内面には／Cave、行列、拝木、軒縁 (Architrave) ／には車、行列、拝木の図、外側には花紋／佛足、左右に軒縁を支へて居る形の女像は／足部を欠いて居る。門を入ると磨滅したる／佛の坐象が置かれてある。玉垣に沿って東に／廻る。東門、象と乗手を柱頭に冠す。右柱前／面、宮殿、女の舞踏、内面マヤの夢 (其の／附近には多くの牛馬が見られる) シツダ太子、／五人の弟子。左柱前面法律を拝ス／ (車と三又戟 (箱形上の?) を以て現はす) 。／佛陀家を去り嘆ける 小舟の景、其の／周囲の水と魚は中々面白ろく思はれた。／台所、拝火、仙人。軒縁前面塔と木／を拝す。佛足、背面、人と種々の動物、象が／木を拝す。南門に廻る。此の門の直ちに東側に／アソカの柱 (上部は折れて横はり頂上の四／獅は離れて置かれてある) がある。南門は最／も古い四獅を柱に頂く。右柱は修繕され／たる新らしき石柱で古きもの、破片は其の附／近に集められてある。左柱宮殿中の／佛棺、王座、聖骨行列、軒縁、中／央に塔を置きて群衆の図、都の攻圍 (?) ／此の門の内の所から塔の台坐に石階が／あって上られる。狭まい台上のプラットホーム／を通過して北門の辺迄往って見る。今ま塔／の西南部の破損せる部は修繕せられつ／、あるので南門の西部に垣を越へて路／がかりにつけられてある。多くの者が石を積／んで居た。西門 四侏儒を柱上に冠す。／右柱前面 弓の試合、拝木、内面拝木／其の上に傘を立つ。左柱前面 男女の愛を／画く。内面仙人、木の祭、舟、軒縁前面／佛骨棺の行列、シンボルと木の崇拜。背面／塔と拝木、ガイセン行列。此の塔と／玉垣は阿育王時代 (250B. C.) の作であって／門は50A. Dの頃に建てられ、門内の像は／後四五世紀頃附加されたものである。／今ま此の附近から発掘された種々雑多の／石片が地上に併べてある。塔上の傘形の／円い石や其の囲りの玉垣の様なものもあ／る。南門より南に美しき柱列の残存して居／るものがある。東部は一段高くなって種／々の建物の跡が見られる。一番東に／当って一大建築の一部が高く残り

内に／佛の坐象がある。其の附近の柱に彫ら／れたる彫刻（男女の愛の図など多く見られる）／
など中々に美しい。其所等には彫刻の／切れが多く併べてあった。此の一段高／い所から塔の東
門を正面に南門、北／門を側面に眺め、遙かに低く連らなる／丘の重なりと將に西に沈まんとす
る黄／色の太陽とを眺める景色は何んとも曰／はれぬ。塔の直き向ふには低く森があ／り赤い花
を着けた木は諸所に立って／此の黄と紫の図を変化あらしめる。自分は／此の景色を傍畝やかぐ
山を持つ大和／の平野に似通って居ると思ふ。此のサンチの／山も桃山附近の景に酷似して居る
と思／ふ。西日は淡く北門の内側の上部に／反映する。西門の前から丘下に通ずる／赤石の道を
下る。丘下に一塔がある。／其の門と特に玉垣の花紋は非常に／美しいものである。此の塔は丘
上の／北部のものと共にKasyapaと／Mogaliputra（前三世紀の有名なる／佛徒）の骨を発見した
と云ふ。／ダックバンガローに帰ったら室内はほの暗い。／番人が鳥の料理をして呉れた。パン
がないの／で印度人の食べる和かな煎餅の様な／ものを食べる。月が美しくさえて居る／落葉を
カサ／踏んで其所等を歩る／く 昼サンチの塔の修復に使はれて／居る男女子供等はバンガルー
の東の／方に假小屋を立て、一部落をなして／棲んで居る。諸所に火を燃して食事の用意を／し
て居るらしい。恰も讀經するかの如き／女の合唱が聞こえる。暫らくすると／胡弓の音と鐘の音
と男の音が交って来た。／自分は其に引きづられる様に其の火／を囲む群れに近かついた。彼等
は自分／を見つけて好意を持った句調で話し／かける。胡弓を持って居る男もやって来て／歌っ
て聞かせる。モノトナスな節と小／さな胡弓の音が月夜の空気を動かす。／燃火の光りに白衣の
男や赤巾の女の動／くのが見られる。別かれて帰り月を浴／びて室外の寢台に寝る／鳥大の蝙蝠
が羽音を立て、上を飛び／交い梢に来てはぶら下る。夜鳴く鳥／も居る。何時か眠る。十二時前
に供／が起こす。帖に名を記しバンガローの／室料 1 Rupeeと二度の飯と茶の代／ 2 Rupee 4 Annas
を拂って停車場／に行く 老人の巡査が荷を持って従ふ。／

十七日。室は一人で能く寝た。九時にJhansi／に着く。此の汽車は遅いので朝めしを食べ乍ら
／一時間待つて急行に乗る。此汽車は二等以上は／無いので特三に乗る。英国人の二少年兵があつ
て／色々不邪氣に親切に話しかける。室の向ふの方／にあつた一印度人は□々蜜柑など持って来
て／呉れた。子供を連れた印度の婦人などが同／車して居る。ガリオールのFortが鉄道の／左手
にあつて丘上に絵の様に見へた。ゼーン／テンブルの一群が併列する丘が見へた／のは其の前
でSonagirの停車場辺で／あつた。また其の前にDatiaの美しい丘上の／宮殿の跡を見た。豊饒な
る野も越えて／非常に荒れて南部印度の寺塔の如き土／の突起の□の様に置かれたる土地を過ぎ
る 其／の附近に大きな河（幅四五町もある様な）／が低く土崖の下に流れ河原には畑があり／
水辺には白さぎの一群と鶴の二三羽／が小さく見へた。此の辺の土の突起は／特にPuri附近の建
築を思はず様に／横線と縦線とを以て居た。三時前にTajが／白ろく輝くのが見へ出した。カン
トンメント停車場／から砂ほこりの路を宿に帰る。／夜、食後TongaをかりてTajに行く／月は十
四日頃で涼しい空気はイミリーの併木／を包む。門の内には美しい燈が点ぜられて／居た。門か
ら水溜りを越へてドームを見る。／まるで夢の様に浮き上る。中央の台に上る。／□は月影に光

る。腰をかける。蓮の葉が黒く／前に浮く。タジの下の廣い場所を一廻／りする。帰途カントンメント附近に／印度人の結婚の祝ひの爲めに催された／踊りを見に行く¹⁷。一寸した廣場に赤白の／□の天幕を広く張って中央に四五人の男が／何かして居り其れを取り巻いて多くの人が／衆^(ママ)まって居る。老人連は水煙草など喫い／ながら見て居る。サーレンギーをひく男と／大鼓を二個腹部へ風呂敷の様なもの／釣って其れを面白く鳴らして居る男と／滑稽を云ふ男が四五人立ち替り立ち替り／饒舌る。東京で見る茶番そっくりである。踊／り子が出て来ないので一時半頃迄待つ。漸／やくにして其女は出て来た 白絹を頭から／冠り濃紅の上衣を着け黒に金の縦菱形／雷形の金の模様を着けたる袴をはく。頭か／ら垂れる白い絹の□の金線や右肩から／左脇下にかけて絹や上着の肩につけた金の／飾りがアセチリン／のランプに輝される。二／人の男はサーレンギーを持って其女の両方に／立つ。二大鼓を前に釣った男は背後にひか／へる。前の於どけの男等の組とは／異なって樂人等も甚だ眞面目である。其態／度も極めて宜い。其の口で歌ふ如き／サーレンギーの合奏はたまらなくよい。大鼓は／不思議に変化ある音を出す。踊りは初ま／った。手首が微細に動く。袴がキリット／擴がって足にまきつく。動く時は突然に／急に、静かな時は僅かに手先と頭から／手に渡る巾れが波打つ。二時半 月／を浴びて帰り寝る。／

十八日。今朝七時に起きるのは非常につらひ事／であつた。九時二十分発の汽車に漸やくかけ／つけてホツとする。野の景色は美しい。汽車／が大きな路に沿って走る時に路の併木／の下に驟馬の数十を追ひ行く人、駱駝、／イッカーを走らす人、尚ほ赤い巾を頭／より着たる女が子供と共に馬に乗り他の馬には少年が／荷物と一緒に／乗り年とった男は之等を追って行く光景は／絵巻である。坩にて塗り上げたる村が／丘の上に築かれたり。宮殿の如き廢残の／建物^(ママ)がMatura附近に多く見られた。／面白い風俗の群衆が此の附近の停車／場で昇降する。自分等の室に後ちに乗っ／て来た洋装の大きな印度人は言語に就いて／自分に語りまた印度人の労働者が一日に／六アンナを得る（石割など）事や銀行の書記／でも十五ルピー位の月給であるなど印度人の薄給な／事を語る。（先日聞きた事であるが巡査は／月十ルピーか八ルピー位得て居るとの事だ）／

Delhi／砂ほこりが黄色に霞んだ野の諸所にモスクの／数々や建築物の一部が遣り居るなど絵の／様な風景が窓外に見へ出した。之れがデリー／の南四十五哩平方哩に渡って築かれたる古の／Delhiの都の遺跡である。汽車は六時間／を要して三時半頃Delhi停車場に入る／（急行ならば四時間で達する）Woodsland／Hotelに入る。和田君が待つて居る筈で／あつたが昨夜立つたとの事だ。夜トルコ／風呂に行く。蒸し暑い大理石の室で頭から／なまぬるい水を絶へずかけ乍ら男が柔術の／かたの様にマッサージして呉れるのが中々／心持よい。余程の時間を要した。筋肉をの／ばし皮膚をこすつてあかを流し其のあとで／下室の水風呂に飛び込んだ時は／何んとも曰へない。風呂は四ルピーをとる。／

十九日。朝飯が終つてTongaで／十一哩南なる^(ママ)Kutobの塔のある／場所に向ふ。ラホールゲート

から出て真直／に南に通ずる大道路を走る。今ま英政府が／主府として準備しつゝある新デリーの都は此の道路／の附近に見られる。其のプランは廣大なものらしい。／其の爲めに特に造られた煉瓦製造場や、労働／者の長屋が多く見られる。五哩位往って／直き路の西に立つ一構へはSafdar Jang／王の墓である。一つの大理石の墓石をも要しないと／の遺言で王と後の墓は只だ室下室の土間／に土を一二寸の高さに積み上げたのみである。／赤石と大理石を交へて建てられた建築は可成／り大きい。園丁の捧げて呉れる矢車草をボタン／の穴に挿してトンガに乗る。路は併木を以／て蔭を造られ甚だ心持ちよい。路の両側／に回々教の塔の跡が数多く野中に見られる。百姓は牛を以て水をくむのに急が／しい。牛の二匹が井戸端の坂を下って掘り込／んで下に達する時に井戸の滑車には大きな皮袋が／水を満たして上って来る。其れを待つ男は大／声に叫ぶ。彼れは毎度ヒンドウの神／の名を呼んで居るのだと云ふ。下に下った牛の／一對は繩をはづされて他の路に向き更はる。其／所に待つて居る他の一對の牛は同時にのっそりと井戸端／に上って行く。そしてまた坂に向って水を牽き上／げ乍ら下って行く。二時間を要してKutab／Minarに来る。古きヒンドウの寺院の上に／回教の寺院が蔽ひかぶさって建てられる。／Imam Zaminの墓とAlai Darwazahの／細かく彫刻された門を見てKutabの塔を／仰ぎ、内の暗い石階（思ったよりも中には悠くり／した石段が美しく積み上げられてあった）を上つ／て第一階の廊下に出る。古きデリーの色々な／時代と君主によって建てられたる建物が／丘の上や野の中を点々と残る。遙るかに野／は霞んで見へる。美しき印度教の柱列（神像／はことごとく其の面も体もきづつけられてある）／を見 中庭の鉄柱を見る。Altamsが／建てかけて未成の儘になって居るAlaiの／塔は少し離れて北にある。馬鹿に大きな規／模であるが見る可き何物も無い。ダックバン／ガルーにてレモン水を飲み再びトンガに／乗る。Safdar Jang の墓の所迄戻って／路を東にとり二哩ばかり走ってHumayun／王の墓に来る。之れはまた少々異なつた／プランの建物である。プラッホーム^(ママ)に登り東南に／一は普通一は青紺色のタイルではられた美しい／ドームを見る。北にオールドフォートが大／きく見られる。Old Fortの前に来て其／の廣大なる壁を見上げる。門だけは回教／建築で後から附加されたものであらう。其等／が壊れかけて壮大なる光景を形造つて居／る。Humayunは此の城壁の上で月を／拝して其時に落ち死んだのだと案内者は／分からぬ英語で語る。Old Gateの下を通／ってデリー門から市に入る。三時に帰りつく／（セルピーのトンガ賃をとられる）。／茶後Fortの前を通りJama Masjid／に行く。靴の上にカバーをはかされて石の中／庭を歩き南側の壁上から町の群衆／を眺める。白を主とし種々の強い色の点々と¹⁸灰白色の牛の数十匹の一群が町に／一パイに擴がった時には甚だ美しき／ものであった。サインして出る。附近のゼーン／テンブルを見る。小規模のものでまるで天平時代／の模様の如き裝飾が一面に施されて居た。／佛堂も細かき細工で日本の佛だん／を思はした。廊下に置かれたる經机は／其形も模様も色も天平小机にそっくり／であった。Bazarの一店に這つて^(ママ)印度の／絵を見三枚を二十ルピーで買ふ。／他の一店に入ってテーブルクロスのような布を／四枚（ハルピー）を買ひGolden Temple／でガイドに別かれ宿に帰る。／夜散歩。印度教の者等が祭りの火を町の諸所にたく。／

二十日。ヒンドゥーの大祭日。／朝 場末のKalan (Great) Masjidに／行く。ブロードな古い建物で嘗ては此の都で／最大のMasjidであったので此名がある。窓／の格子も中々ガンコに出来て居る。／今日は印度教の大祭日である。町々に／群衆があつて其の顔は丹で眞赤に塗り、白／い新らしい着物は黄色の水で色つ／けられる。若い男等は赤い粉をお互に塗り合／ひ水鉄砲で其の白衣に黄水を注ぐ。群衆／の中には異様な風をした男が於どり／廻る。笑顔せる赤鬼の行列である。小さ／な町から電車の通るChandni Chauk／の本通りに出て其の西のつき当りの一Masjid／を見る。多くの参詣者等は廊下の様な所に坐／シテ コランを讀んで居る。本通りでブリキの／箱、婦人用のうす絹、眞鍮細工、を買／つて帰る。絹は二枚で六ルピー、眞鍮器具／は六個と一□、時計ひも、耳輪とで／十五ルピーをやる。かけ引きに時間をとる。／帰り昼食する。夕方汽車に乗る。一印度人が大／きな煙管を据えて喫煙して居る。室は四人用で後から／英人が一人乗り込んだので満員となる。直き寝る。／

Jaipur／二十一日。朝五時半頃にJaipurの停車場／に着いた。まだ夜のひき明けで停車場もほの／暗い。宿引が三人ばかり来た。New hotelの名を／和田君から聞いて知つて居たので其の宿引の／老人と共に外に出て踏切を渡り田舎道を通つて／宿に行く。室はよくファーニッシュされて居る。恰度其／時に往来の方で人が騒ぐので廊下へ出て見たら往来／の向側の百姓家が火事になつて居た。其所らには／二三軒づゝ極く小さな百姓家が飛び飛びに在／る。宿の前に四軒併んで建てられた内の少々大き／な一軒が焼け出したのである。二十人ばかりの人が其／の傍に立って見て居る。一人の老人とも一／人の男が手を顔の前にあげて大きな声で吐鳴／つて居る。泣いて叫んで居るのである。ボーイに聞／いたら食べ物も着物も皆な焼けたと叫んで／居るのだと云ふ。ポンプの一個も無く、かける可き／水の運び様もない此の村では只だ焼けるに／まかせるより他に道が無い。土塀を残して藁屋／根は十五分もかゝらぬ内に焼けてしまった。焼／けた屋根が下に落ちて燃へて居るのへ其所等へ／集まった者等が灰の様な乾いた砂を手で／てんでにかけて居る。老人は火を見て吐鳴つて／居たが残った隣家の壁の所に坐して声を長く／引いて子供の泣くやふに鳴く。悲惨で／ある。此の附近に特に見る眞赤な布の女等／や男が集まって焼けた家の前の菩提樹の下に／立って何か曰つて居る。其のグループは美しかった。／彼の老人は遣つた子牛を木につないで居たが大／きな水煙草の煙管を前に置いて路上に坐し／一すひしてはまた泣いた。焼き殺された牛を／数人して運び去る。大きな菩提樹の枝／が燃へてまだ煙が出て居るのを一人の男が登／つて水をかけたりなどして居る。／宿引の男を案内者にして馬車でGaltaに行く。／Jaipurの町は宿から十町位の所にある。大き／な淡紅に塗られた門を内に入る。其所には／廣い往来を中に挟んで今迄に見ない形の大きな／家が多く淡紅に塗られたる平たい壁を持つて／両側に併んで誠に珍らしい。此所の空はまた／余程青味が深い。馬に乗って行く人が／多く見られる。女はシボリの大きな模様の布を／かづき腰には袴形のヒダの多いものをはいて／居る。駱駝に乗って悠然と行く人^(ママ)なもある。／總ての風俗は非常に面白くなって甚だしく／今迄見た印度の風俗絵を思はせる。／此町に来る途中七八才の女の子が三四人居た 其／の内の一人は赤と

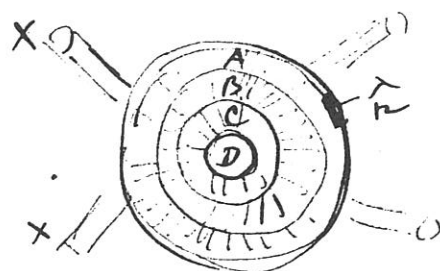
黄のシボリの布を纏い頭上／に三個の眞鍮の小瓶を重ねて置き何か草の／様なものを其れに挿して居る可愛い子で／あった。其れはシバの妻の神に良夫を得／ん事を祈るために往きつゝあるのだと曰ふ。／此のRajputanaの都なるJaipur／はMaharajaが印度教宗なる故で／動物を殺す事が禁ぜられてある。そして次の様な／罰が制定されてある。孔雀を殺す者は六年間、／鳩は二ヶ月、猿は六ヶ月、牛は十二年の禁コ／に所せられる。眞鍮細工の工人が家併に／列なり、或家では数人の女が大聲に歌ひ／乍らひき臼を廻して居る。マハラジャの一人／が或る女を見るために造つたと云ふ高い塔／の下を過ぎ直ぐな大通りを通して他の門／を出て其所で馬車から下り石を敷きつめた／阪道を登る。ふり返って見ると白い家の重な／りと緑の樹とが廣く見られ右方にアンペール／の城を頂に持つ山が見へ、ア□ゼンスを思／はす様な風景が廣がる。石路を曲り曲り上り／頂上の小さなヒンドゥーの寺の前から下り阪となる。其／の遥か下方の山と山と相接する谷間に多くの／建物が別の世界の如き不思議な感を持／って眺められる。顔の黒い尾長猿に買って来／た豆をやり乍ら其所二下る。泉がある。泉は／黒くよどむ。『ガンジスの水』と称するので神／話が其れには附従して居る。壁の建物に囲まれ／た此の水は小さな瀧の様になって壁の穴から／崖をつたって下の池に流れる。其の周囲には／神の祭壇や壁や建物がある。男の数人が／浴して居る。また一段下には女の浴する水溜め／がある。其の下方には三棟四棟の変った細／かく裝飾された建物がある。其の壁はサラサ／模様の様な色で群衆など画かれてある。／猿は幾十匹も其の辺を飛び廻り建物に／やすむ。子猿を腹にいだいた母猿は／長い尾を巻いて岩をつたふ。美しい孔雀は／遊ぶ。此の光景は今迄のものとは全く／異なつたる感をいだかしめた。寺の中／にはヒンドゥーの神を祭って数人の僧侶が居／た。十一時頃宿に帰って三時頃からまた町／に行く。マハラジャの厩に馬の三百匹がつな／がれあるを見、また天文台をのぞきPalace／に入る。淡紅の壁と色々に塗られた多くの／建物、庭園、二百人の妾また／歌女や此の種類の子の棲む家。舞妓／に薄きぬを着させて屋上より水溜めに／すべり下りさせ遊ぶ場所など見て出る。町／で古い絵とシボリの中を買ふ。此地には／安い石が名物で宿と町で買ふ。五時二／十分汽車に乗る。／

二十二日。夜の明ける頃から珍らし／く山が見へ出した。マウントアブが其の一つ／で朝日を浴びて紅のバラ色をして居る。／アブロードの停車場に来た。時間が許さない／のでマウントアブにも行かれない。此の附近／から例の猿が非常に多く居る。また野の／シャボテンの蔭などに孔雀が群れをして／息んで居るのがよく見られる。セーサナ（？）／の停車場などでは猿が汽車の屋根などに来て遊／ぶ。何十匹もが尾をまき銀色の毛を風に動かし／て軽く飛び行く様は面白い。野の路を／駱駝の背に跨り子供等を尻辺に二人ばかり／くっつけて乗^(ママ)て旅する人など面白い。白驃／馬の何十匹に何か積まして行くのが見へる。／十時頃は大変に暑い。昼頃Ahmedabad／に着いた。Grand hotelに行く。／町はまた甚だ様子が更って来た。特に目につく事／は木材を多く使用して居る事である。木の柱、腕／木など黒く塗られたものやまた色で塗られたものが／多く見られる。其の木材には美しく彫刻されたのや又た／腕木などにコデコデグロテスクな彫刻を施したのが／往来に見へる。扉は美しい印度式のもので心持ちが／良い。柱の塚は美しい石の彫

刻である。／Veniceのサンマルコ柱頭は此の塚を持って来／たのでは無いかと思はれた。穢なく住んだ家々の入／口に之等の美しい彫刻がゴロ／ころがりベランダ／の様に出来た所に寢床を出して女（少々色が白／ろくなって来た）が腰を下ろして居る。町の群衆の／数は非常なものでまるで絵の様だ 色は白と赤である。／此地は商買地で其の多くは染めた布である。家ごとに／シボリの布を賣る。トンガと普通馬車とを合せた様な／馬車で寺の一二を見に廻る。Sidi Said's Mos-／queは例の美しい窓があると美術新報に書いてあ／ったので其れに行く様命じたが途中に一礼拝堂／ダスクロイマスクと云ふのを見つけ之れに其の／目的の窓がある事を発見した。四枚とも美しい。／Sidi Said'sに行つたが窓は無いので矢張り／初めのが其れであつたと知つた。之れは古い／ヒンドウの寺院で美しい柱の数多くが立つ。Mos-／queになつて佛像など壊したと見へる。／Bhadra Gateの下を通り本通りに出て美しい古／いTriple Gatewayの下を潜りJumma／Masjidの小さな入口の前に馬車を下り石段／を登る。門口は小さいが内は廣い敷石の庭／で中央の水溜めの縁に額を石につけて／礼拝して居る。本堂の内に入り色々な形式の格／子の窓など見る。一段高い所に設けられた室は／婦人 多く王宮¹⁹の爲めだと云ふ。王が礼拝したと云ふ大理／石の敷いてある所も此の二階の様な所にある。／東の入口より出て其所にAhmad Shahの墓を見、賑やかな往来を越／へてAhmad Shahの後の墓に行く。人家の密接に立ち込んだ中にある／立派な建物である。美しい石格子のあるプラットホームを一巡する。Rani／Sepreeの墓場に行く。小さな建物であるが／格子窓など美しい。僧侶が来て説明し其の子供等／が靴のちりを布でふきなどする。 群衆の町を通／り蛇使などが瓢箪笛を吹いて居る広場の／傍を通つて宿に歸る。非常に暑い。寒暖計／は九十六度位であつた。八時に夕食をして停車／場に出る。汽車が満員の様なのでまごついたが／inspectorが来て世話を焼いて呉れたので助か／つた。印度人の學生の様なと二人の老人とで／満員となる。眠られない。月が白ろく野を照らす。／

二十三日。七時半頃にはBombayに着く／筈である。綿の野も過ぎて漸やく樹木が増／して来大市外の郊外の様子が見へて来る。多く／の小停車場を過ぎてBombayの市に入りChurch／Gate Stationに下車する。宿引と共にApollo／Hotelに入る。茶を飲み朝飯を食つて／正金に行き五十嵐に会ふ、三井に廻り、其所の人／に案内されて幻燈の絵を買ひに行く。宿に歸／り昼食後マーケットや、其他の町を歩く／また五十嵐氏と馬車を共にして一二の古道具屋を廻／り別かれる。夕食して印度の芝居を見に行く。／歌劇の様なもの筋は或る妻ある金持ちの男が／酒色に財を散じ遂にとばくで持てる總て／を失ひ、歌ひ女にもすてられ悪友にも捨てられ／遂に初めより忠告せる良友と妻に歸ると／云ふ様な筋であつた。時々はさまれたる於ど／りは美しいもので其の手ぶり身体の運び、ひね／り、くびの動きかたなど佛教彫刻の天人／其の儘で美しい。殊に手の廻し具合は到／底他に見られぬ美しき動作の進行で／ある。歌の節はよくやうと振はしの多い／ものであつた。オーケストラはオルガンと／大鼓が主でタンブリンの様なものも時に交／へられる。十二時迄見る。／

二十四日。チョータハジリを食ってパーシーの／葬場なるTowers of SilenceをMala-／bar Hillに見物す。三つの公衆の／為めのTowerと一つの自殺者、病院に於／ける死者の塔と、一つの一□の塔とを／林の間に見る。禿鷲が其等の建物や神聖なる／火を燃す堂の屋根に死体の来るを待つて居る／towerの内へは定まつたるオ□ポーの他には誰れも／入る事が許されてない。小さな模形がある。／



Aは男、／Bは女、／Cは子供、／Dは一段深くなった穴／で入口より入れられたる死体は二時間にして／禿鷲の為めに内を食ひ尽され骨になって大／陽にさらされる。或る期日の後ちに中央の穴／に其の骨は粉の様になって入り雨水／と共に流れ×の所に於て再び／其の穢水はこされて純潔なものとなって地／下に入るのだと説明する。パーシーは印度人／よりも余程欧州化して居り、立派である。／Bombayの町に見る多くの美しく装い快活に／歩く西洋婦人^(ママ)に似なる色白の婦人はパー／シーに□する。眼鏡をかけて居るのが非常／に多い。／帰って朝めしを廃し用意して船に出る。／十一時 Victoria Dalkで吉林丸に乗込／む。一等は四人だけで満員である。十二時出帆／Bombayの町が岸に長く列らなり赤い建物／が高低して居る。／

四月四日²⁰。シンガポール着。同日午後後四／時発。

【註】

- 1 Brind's Hotelの誤記と思われる。
- 2 トーマス・クック・アンド・サン社。同社でホテルクーポンを購入したりや汽車のチケット手配を依頼している。
- 3 ールピーは65銭に相当するという（南薫造「セイロンよりマツラまで」（前掲）p. 44）。
- 4 Hotel Continentalの下の余白に、ホテルの所在地である「Chowringhee Road」との書き込みがある。
- 5 以下の文が余白に書き込まれている。「或ル家村に禿鷲の多くが土壁、土べいの上 樹木の上にとまったり□く飛んだりして居る。死人を食ふのである。鷲飛ぶ。」
- 6 帰国後に「以前、印度に行く迄は希臘の影響を受けたガンダラ彫刻が非常に面白かったけれども印度に行って多くのズット古いものを見るとガンダラなどよりまだへ面白ろい寧ろ恐ろしいものに多く出會った。」と語っている（『印度茶話』『みづゑ』第155号・1918年1月号p. 10）。
- 7 諏訪丸の事務長・栗米吉と考えられる。
- 8 2月23日に郵船会社の社宅に永井、山本、瀬尾を訪問している。
- 9 南はタゴール兄弟について、詩人タゴールの甥にあたり、ガゴネンダラの作品には「波斯風繪畫に多くの歐羅巴風が加はつ

- て」おり、「アバニンドラの方には日本畫の感化が多い」と紹介している（「印度茶話」前掲p. 9）。
- 10 カルカットで南が使用していたスケッチブックには、「大観、春草の絵ハガキヲタゴール氏に送る事」などこの訪問後のものと思われるメモがある。
 - 11 南の長男・陽造誕生を、南の父・啓造が伝えたもの。
 - 12 内容上、この1行は後に挿入したものと思われる。
 - 13 以下の文が余白に縦書きで書き込まれている。「ガンとモールドィングを持つ。多の像や小塔（塔の模形）紀元後八〇〇—一〇〇〇。
 - 14 「ナプールの寺を」の下の余白に「Nepalase Temple」との書き込みがある。
 - 15 『中央美術』第2巻第6号では「中央より偏して」と語句が補われている。
 - 16 「ダックバンガルーと云ふのは旅行社の爲めに政府が建てた休息所である。安い料金を出して二十四時間だけ一室を借りられる」（南薫造「サンチとデリー」『趣味之友』第1巻第6号・1916年6月号p. 55）
 - 17 以下の内容は作品《婚礼の夜の催し》の関連記述と考えられる。口絵5参照。
 - 18 文意が通りにくいのが、雑誌に掲載された際には「種々の強い色の衣服を着けた人の點々と」（「サンチとデリー」（前掲）p. 633）と語句が補われている。
 - 19 「多く王宮」は挿入句。
 - 20 インド日記最後の記述である。広島到着は『美術新報』第15巻7号（1916年5月号 p. 44）によると4月19日である。

（ふじさきあや／当館学芸員）

広島県立美術館 研究紀要 第7号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.7

発行日 2004年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 大成印刷株式会社

〒731-0138 広島市安佐南区祇園3丁目24-17

Tel.082-875-3232